



911.3
ク

人
五
百
題

無東漢編輯

今久五百題

涉躐子輅按令



叙 漢

古より不例ありしを例とししは漢ありしを
 條と攀つてし言文さるるもあらずし
 といへしまのいふとつてたがひありし人
 とは五百題ありしを少く見たりといふ
 事しては恐るべきことなりし不見あり
 流りありしを意ふるを不意なりし
 ありしを流りしをいふるを不流なりし

そはれはさるるをいふはさるる

類うらひかへるるく一層のゆゑ

かゝぬるに似たるを遷史も注し

る後う海申るるをいふはさるる

きけよく不変流形下り

いふまへ即今時の活句いふ

めはるるり一功業を誰人か

まのまゝら出雲人なる東漢云

東けもあは江戸下り住居をら

子転るるをいふはさるる

いふは世のやいふはさるる

いふはさるるをいふはさるる

いふはさるるをいふはさるる

いふはさるるをいふはさるる

いふはさるるをいふはさるる

いふはさるるをいふはさるる

白ありて人々白ありて是ありたりし也
物々もああれ其部族やも思ひまほ
あまをさふたそ今人の白あり 回教
さーくくしものささる補ふ

○等類同案の白を陰き中と射古とある
さばく之友と筆記も中と貴族老若の
陽を志す事重舟舟のつらぐのさ

○み七五の文字上を下ありをさり置
或はてふをほ短く名業されしもの
あはれと古に信家より出る事さう接より

又ハ人信のりさたるをさすに古
たすもあまは是能ハその仍若のさう
信て取おる

○位より考へし以て人の身成り強さき
あまわすかめをその信し強さき
あまハあまそれあまをさるく何れ
信強をあらう一長くの家安さうたす
あまさうあり

買入証

明治三十五年弥生月百朝

大町吉物見世

源助使十金檢志

(王下合下) 買入

梨葉

今人五玉顯高之部目錄

花	一	櫻	二	糸	三	四	初	五	四
逢	四								

歲旦部

元日	五	初室	五	初日	五	初	六
----	---	----	---	----	---	---	---

初霞	六	初務	六	初	六	初	六
----	---	----	---	---	---	---	---

初曆	六	初	七	書	七	之	七
----	---	---	---	---	---	---	---

花春	七	初	八	箱	八	門	八
----	---	---	---	---	---	---	---

大	八	嵩	八	屠	八	雜	八
---	---	---	---	---	---	---	---

冬著	九	管	九	蓬	九	柳	九
----	---	---	---	---	---	---	---

書初	九	壽	十	筆	十	書	十
----	---	---	---	---	---	---	---

子鞠 十 破戸弓 十 水祀 十 若水 十

植物之部

子日 十一 小松引 十一 七種 十二 若 十三

芥 十二 若菜 十三 梅 十三 柳 十四

野老 十五 下蒲 十五 若草 十五 糖 十六

红梅 十六 木の芽 十六 落臺 十七 葉 十七

莖 十七 五加木 十七 藪草 十七 山菜 十八

木瓜 十八 芦角 十八 榑木 十八 茶摘 十九

棠? 十九 菜花 十九 桂御 十九 梅 十九

海棠 廿 連柄 廿 梨花 廿 虎杖 廿

木蓮花 廿 青枝 廿 苗代 廿 蕨 廿

生類之部

黃鳥 廿一 猫の患 廿一 白臭 廿一 鳥の巢 廿五

親雀 廿二 雀 廿二 雉子 廿二 雲雀 廿六

帰丁 廿三 玄鳥 廿三 駒鳥 廿三 鶯 廿八

嚇 廿四 玄鳥 廿四 鶯 廿四 鶯 廿八

律 廿五 鏡 廿五 鶯 廿五 鶯 廿九

往 廿六 鶯 廿六 鶯 廿六 鶯 廿九

鳥の調 廿七 鶯 廿七 鶯 廿七 鶯 廿九

時候之部

佐佐班 廿八 むつき 廿八 如月 廿八 珠生 廿九

左義長 廿九 強引 廿九 雲 廿九 掃月 廿九

佩 卅 鶯 卅 鶯 卅 春寒 卅

河返	廿五	暖	廿五	燒野	廿五	山燒
殘雪	廿五	春雪	廿五	雪解	廿五	春風
喜風	廿七	喜雨	廿七	春日	廿七	春の霞
春夜	廿七	春月	廿七	春水	廿七	水温
海苔	廿九	草餅	廿九	糸柁	廿九	陽空
二日灸	廿九	初午	廿九	彼岸	廿九	市忌
涅槃	甲	西行忌	甲	永日	甲	出代
雛	甲	鷄合	甲	汐干	甲	長閑
畠打	甲	田打	甲	別家	甲	春祭
壬生師	甲	峯	甲	夏边	甲	春惜
行春	甲	春潮	甲		甲	

今人五至野夏之部目録

生秋之部

時令	一	閑古	三	老学	三	与雀	三
翡翠	三	羽枝鳥	三	轉	四	水鷄	四
鶯	四	喜鷺	四	浮巢	五	管	五
飯福	五	法の子	五	枝枝	六	毛虫	六
了了	六	蚤	六	繩	六	水鳥	六
蚊	七	蚊柱	七	故道	七	蝸牛	八
蝉	八	まの子	八	灯取虫	九		
更衣	九	裕	九	青簾	十	葵菜	十

時候之部

あり 十 外 十 草月 十 水月

交花 土 夏草 土 灌餅 土 花月

筑十葉 土 大矢草 土 經夜 土 麦株

美さう 土 新茶 土 錦 土 松奥 土

傾カヤ 土 懐 土 梅 土 午池木 土

競馬 土 赤餅 土 五月雨 土 入梅 土

虎う雨 土 五月鬧 土 交月 土 麦望 土

交山 土 火串 土 田植 土 早乙女 土

早苗 土 青田 土 田子飯 土 廟子 土

芝庭 土 吊帳 土 夏羽狭 土 怪子 土

総園會 土 水室 土 富士詣 土 雲等 土

一夜酒 土 暑 土 夕多 土 簞 土

竹婦人 土 涼 土 風薫 土 麦粒 土

心太 土 打水 土 瓜 土 冷瓜 土

沖鱈 土 漬瓜 土 葛水 土 さりる 土

交夜 土 川橋 土 秋色 土 七の巳 土

湯枝 土 植物之部

若菜 土 菜蓨 土 若杞 土 新樹 土

茂 土 木石園 土 交木 土 常盤木 土

桐花 土 葉柳 土 玄柚 土 玄梅 土

櫻花 土 桜花 土 粟花 土 合歓花 土

夏草子 土 楊梅 土 柿花 土 玉の如 土

燕子花	卅三	牡丹	卅一	芍薬	卅一	葵	卅一
苔花	卅一	弁の花	卅一	菖子	卅一	茨花	卅二
柿の子	卅一	菖	卅一	茄子	卅二	豆花	卅三
角豆花	卅三	红花	卅三	夏草	卅三	接子	卅三
百合	卅三	橘	卅四	芙蓉	卅四	唇魚	卅四
かごとも	卅四	室宿各	卅四	夕旅	卅五	藤花	卅五
洋	卅五	藤州	卅五	葛藤	卅五	川骨	卅六
葎	卅六	蓮	卅六	浮葉	卅六	伏降	卅七
石菖	卅七	柏志の	卅七	若井	卅七	今年外	卅七
林檎	卅七	夏朗源	卅八				

今人五玉歌集百集

八雲 東 溟 轉
 涉壁 千 輅 授
 桐家 名代也 悠く 一具 了知 由善 月夜 茶枕

花

春之部
 八雲 東 溟 轉
 涉壁 千 輅 授

桐家 名代也 悠く 一具 了知 由善 月夜 茶枕

花のゆくもやとて花のゆくもやとて
ありては花のゆくもやとて花のゆくもやとて
有程の花のゆくもやとて花のゆくもやとて
日な一日御き出でて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて

非若
典干
言子
兩堂
粗文
儲年
葉文
祖令
松秀
可全
大七

花のゆくもやとて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて
花のゆくもやとて花のゆくもやとて

梅通
英文丸
杜有
一映
一見
董史
千壽
松隣
山外
卓池

あはれやりの毎は春の終り支
宿の出ぬむきハ海りの花見計
ましよあはれなりて百葉のひと花
ちる春もあはれなりて百葉の花
あはれやりの毎は春の終り支
宿の出ぬむきハ海りの花見計
ましよあはれなりて百葉のひと花
ちる春もあはれなりて百葉の花

大 松
淡 藤
得 藤
抱 藤
波 同
苔 瓦
水 松
湖 山
範 身
逸 剛
信 願

櫻

あはれやりの毎は春の終り支
宿の出ぬむきハ海りの花見計
ましよあはれなりて百葉のひと花
ちる春もあはれなりて百葉の花
あはれやりの毎は春の終り支
宿の出ぬむきハ海りの花見計
ましよあはれなりて百葉のひと花
ちる春もあはれなりて百葉の花

由 梨
左 翠
助 宣
士 言
空 天
味 香
里 春 女
溶 々 々
松 香

手紙あひしるに強て 女まゝに
ふさくとまふはらふの蒼くぬ
よひさへ入物れはまゝなる 山櫻
軽のりふに 夜冷のまゝはなをうか
吹風をまゝのりしるしる 櫻
星の砂まらふしを向ふはなを
ふしるんてまゝをうかす 山櫻
ふゆさむるしをまゝの櫻の
吹よふ風をまゝのりしる 櫻
植まぬまゝのれはまゝ 山櫻
別くまゝのりしるまゝ 山櫻

風朝
春了
二岳
三三
前之
月底
湛石
清年
竹與
完伍
東漢

系

櫻

幹中へはまゝのりのりや系 櫻
下まれのよやまゝのり系はら
手軽まゝのり系 山櫻
咲のりまゝのり系 山櫻

鼎左
柳桂
松隣
嵐外

つ

櫻

あゝとまゝのりしる枝やまゝ 櫻
暈障のまゝのりしる 山櫻
まゝのりしるまゝのりしる 山櫻
まゝのりしるまゝのりしる 山櫻
まゝのりしるまゝのりしる 山櫻
まゝのりしるまゝのりしる 山櫻

沙鷗
者母
夫翠
負祗
梅香
草池

逢 櫻

初さくらをさくれー踏山武
水鳥も廻りてあふーさくら

互尔
千粒

少遠く入る甲斐あり逢 櫻

木木

日何さうかときたり地は逢 櫻

慈光

鳥さけやそれと木逢 櫻

水竹

氷百の降る山の逢 櫻

杜有

まきさへありや梁舟の逢 櫻

發物

元りや葉をさくむる逢 櫻

蒼乱

元りや中さ地を踏踏る逢 櫻

逸測

元りやあふて逢 櫻

井左

子んや元り逢 櫻

潮長子

元りやさう逢 櫻

相一

元りや成と様や門の逢 櫻

逢流

元りの名もの逢 櫻

史子

元りや水の上逢 櫻

南枝

元りや逢 櫻

護物

元りや逢 櫻

風明

元りや逢 櫻

大

元りや逢 櫻

梅

元りや逢 櫻

由

元りや逢 櫻

葉

元日



初吉

初日

初日世をあらたけし骨に
をんまの命も何の念もなく
梓高支たけり甲斐ある初り哉
汐りそつとけし度と初り敷
掃出で意とけし初りと
二云車を初り初日と
益人の時と初り初日と
ふたつと初り初日と
あまのき方と初り初日と

千代

得黄

長山

仙居

未月

素屋

芳英

曾見

初雞

初雞のりや唯冬の初り
初雞や喜海原の初り
と川初や中と初り

山骨

竹年

梅香

初鹿

初鹿のりや唯冬
又力也裁鳥
初鹿何見と初り
と鹿先也りの出ると初り

龍風子

桐世

茶屋

本侯

初鴉

初鴉のりや唯冬
初鴉のりや唯冬
初鴉のりや唯冬
初鴉のりや唯冬

山骨

素屋

龍成

初學

初學之始。必先求其本。而後求其末。如人之有身。必先求其心。而後求其手足。此其理也。故曰。君子必先其心。而後求其家。而後求其國。而後求其天下。此其序也。

初學

初學之始。必先求其本。而後求其末。如人之有身。必先求其心。而後求其手足。此其理也。故曰。君子必先其心。而後求其家。而後求其國。而後求其天下。此其序也。

初學

初學之始。必先求其本。而後求其末。如人之有身。必先求其心。而後求其手足。此其理也。故曰。君子必先其心。而後求其家。而後求其國。而後求其天下。此其序也。

初學

初學之始。必先求其本。而後求其末。如人之有身。必先求其心。而後求其手足。此其理也。故曰。君子必先其心。而後求其家。而後求其國。而後求其天下。此其序也。

初學

初學之始。必先求其本。而後求其末。如人之有身。必先求其心。而後求其手足。此其理也。故曰。君子必先其心。而後求其家。而後求其國。而後求其天下。此其序也。

初學

初學之始。必先求其本。而後求其末。如人之有身。必先求其心。而後求其手足。此其理也。故曰。君子必先其心。而後求其家。而後求其國。而後求其天下。此其序也。

初學之始。必先求其本。而後求其末。如人之有身。必先求其心。而後求其手足。此其理也。故曰。君子必先其心。而後求其家。而後求其國。而後求其天下。此其序也。

初學之始。必先求其本。而後求其末。如人之有身。必先求其心。而後求其手足。此其理也。故曰。君子必先其心。而後求其家。而後求其國。而後求其天下。此其序也。

採きの聲もさきかよふさかめも
陽も何より水ももくもくさるる

や
密

候ふあゝ旨もひさし茶のるる

具

杖もいし梅もさくさく花のま

火十

とく春も也終もいさく春のき

北像

春も先記猶もと那のけ

芳英

んあしと茶もさくさく花のるる

半安

人衆のまぬもさくさくあつはる

佐年

繁の戸をたたくへ喚て花の本

唐乳

萬ふとれてりし何れも花のま

阜池

法代
の表

まねかき川も梅も法代のま
葉のたもふんりのまも法代りま

砥山
性

福

壽
草

福壽草花もあつはるる名もさく
乙花はゆて咲く福壽草
言一杯咲ふあつはる福壽草
福壽草花梅もあつはるる名

万
一
松
荷

門
表

門松も花のけあや二日月
門松や町並あつはる寺ハ寺
回を前も門表まもあつはる
松のまもあつはる名もあつはる

風
堂
左
多代

大弓

大弓ややは休あえ一坐のまじり
大弓ややはまじりまじりまじり

千代
東見
東見

萬固

萬固也上坐ありまじり珠の孫
まじりまじりの海まじりまじりまじり
萬固也陽りまじりまじり一年の重
まじりまじりまじりまじりまじり

小葉
小葉
得葉
凡阿

屠獲

屠獲の針をいめてまじり屠獲
屠獲の針をいめてまじり屠獲

萬居
萬居

襪煮

靴糸の糸内煮くま靴煮
靴糸の糸内煮くま靴煮かか
又糸を煮くま靴煮
又糸を煮くま靴煮

卓洲
玄子
慈光
石見

太箸

太箸やまじりまじりまじり
太箸やまじりまじりまじり
太箸のまじりまじりまじり

蓬舟
梅室
梅室

喰

喰つまやまじりまじりまじり
喰つまやまじりまじりまじり
喰つまやまじりまじりまじり

大
大

蓬萊

あし
者

強く喰つてを吐す日かた

蓬萊や顔てをす海老の髪

蓬萊のつらさを中をきく自心外

蓬萊や常は机のあり

蓬萊のあかんなさゆる殿うら女

蓬萊や祖父のいたく長命をす

弄心

梅宮

由誓

落り

茂徳

蒼乳

町崎ふれよのち軽

占春

法慶

万
歳

門邊にまされは女が侍より

礼帳の中は女名を合の入

連をく居て侍る法慶う形

法慶うらなれ傘のせむん其

飯口ハ侍を人とも出さず

萬歳のとらさう女を侍りぬ
万才を二るん思や子世宏
万才を雪踏のまのあくるもろ
萬歳やおれをけまこく言もく

鳳朝

臨里

岱雲

冬夜

大ぬ

松竹
硯額

春雀子

若

抱像

羽子

手鞠

戸木の門引合も手鞠と申す
戸木や焚火でのそす煮の飯
煮や也竹と申すよ片あくる

祀てあらあられと嬉し羽子の音
さしーの敷ついで座を和羽子能
おくらをて途むすあさう羽子の友

咽をねいよふぬるもすう井
氣の祝のもすう屋々和言たり

と傳らや風音とれは毎のちる

櫻
一
水竹

併兄
法石
古翠

渡物
手何

水祝

若

水

老かむもささうのてあ祝
壽おしてとれて海と和 水祝

若水也と解てもらふお戸の蓋

梅溜りく若水 汲り

若水や毎も起る灯の明る

わりの水を汲先ま何の秋晴来

若水の井子庭のあきおすひか

井子庭ひ山ありあふや知字日

由誓
若水

梅香

茶葉

杜鰲

丁生

若非

梅

子

日

小松 奥

野津しと思ふ子りや 鶯の声
眞實を 狐の心 籠るも 不り
世のあつてもあつても 世の子り
子房の 籠るも 子りの 籠り

第一世し あほ子房は 小松我
老の 子りし 籠るも 不り
奥の 子りし 籠るも 不り
有る 子りし 籠るも 不り
と 和 奥し 籠るも 不り
奥の 子房の 籠るも 不り

松計
一具
千輪

桐葉
葉葉
徳々
性子
永月
而後
東漢

七宗

七宗

七宗物 籠るも 不り
姐板の 七宗物 籠るも 不り
七宗物 籠るも 不り

甚く 籠るも 不り
あつても 籠るも 不り
大せし 籠るも 不り
有る 籠るも 不り
あつても 籠るも 不り
あつても 籠るも 不り

籠物
籠る
籠る

籠る
籠る
籠る
籠る
籠る
籠る

芥のふんしつはまはりのは研共

由曾

野の鳴家へ度々也 田芥つと

得筭

芥搗のふんしつはまはりのは研共

毒列

芥搗も搗はつとつと 田芥つと

羽人

芥のつとつとつとつと 田画つと

虚天

芥搗を研共し芥の照葉共

祖々

芥搗と芥と搗んで搗りつと

土十

部は今すいしつと 田芥つと

下多

七多も搗はつとつと 田芥つと

後物

芥搗のふんしつはまはりのは研共

一省

若菜

丁の若菜若菜の若りるは危

一具

若菜若菜の若りるは危

風網

二三の若菜をいしつと 田芥つと

幌子

若菜をいしつと 田芥つと

未葉

若菜をいしつと 田芥つと

芳英

若菜をいしつと 田芥つと

平山

若菜をいしつと 田芥つと

依呼

若菜をいしつと 田芥つと

卓式

若菜をいしつと 田芥つと

身空

若菜をいしつと 田芥つと

岳山

若菜をいしつと 田芥つと

岳海

若菜をいしつと 田芥つと

梅室

桃 さいにすしもはけはるあおき

千粒

桃

山宮や 多岐な花の 桃の 義
桃も 香を 舞うも 香や 桃の花
去 遠 けを 及ぶき 桃の 枝 びり
星 宿を 桃の 宮の 光り せし
桃の 香や 雨の ぬく 月を 並ぶ 香
有 来の 気 執ん ずを 舞う 香
桃 折る 香を 出し ぬく 穀を 香
香を 結ぶ 桃 花の 隣や 桃の花
結ぶ 香を ぬけ 香や 桃の 香
桃の 香 香も 香を ぬく 香

羞恥 抱儀 沙路 湯花 四山子 壺天 悠々 波回 万籟 未木

桃

桃の 月 あり ぬく ぬく ぬく ぬく
折る 香を 出し ぬく ぬく ぬく
ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく
義を 香や 遠く ぬく ぬく ぬく
香を 結ぶ 桃 花の 隣や 桃の花
結ぶ 香を ぬけ 香や 桃の 香
桃の 香 香も 香を ぬく 香
桃の 香 香も 香を ぬく 香
桃の 香 香も 香を ぬく 香
桃の 香 香も 香を ぬく 香
桃の 香 香も 香を ぬく 香

桃香 卓地 大桃 洞天 松竹 芳英 水竹 錦枝女 林竹 流定 一具 貨年

柳

きりくといふ最も明く柳の風
之をちりけし毎ふ驚き日柳哉
市井や柳かききり柳の春
さしたる年思ひし柳うふ
改換柳の池地防と柳うふ
ふひそへ出さきく柳うふ
馬籠く本といふ柳の柳うふ
まき柳の山路といふ柳うふ
ふをさく柳うふふれし柳哉
波川といふ柳あはれ柳うふ

風洞 山外 氷孤 托像 一肖 鼎丸 確額 由誓 大橋 玉圓

聖光

下筋

重たれといふ柳うふ柳うふ
ふ玉の雫子をけり柳うふ
昔柳や葉の積まてつふう光
柳をささけり折る毎々是と
柳陰くあしり利えり柳うふ
昔柳やをまふれし河のう

味合 巨川 一具 庵外 東漢 千輪

群老垢人といふ柳うふ
ふふつは柳葉木ハ昔也老垢

一具 萬居

下筋や柳のあきく柳うふ
ふ柳や馬何といふ柳うふ

由誓 托像

若草

ちとえや通るすまの池のふち
ら花何喰ふあかしくも生のしら
若草のや神の徳もあらうり
わの研のたのまうける然り哉
若草のやあまのりや若草のや
ワの草やまうけひくまの徳
若草のやいそつねをわかあまうし
わのそあまをわかあまうし
若草のや庵もくま世の人出入

若草 得 運 戸 双 由 一 大 後 木
草 葉 流 喚 鳥 誓 具 族 物 木

桂

日の中り花のちひさき桂の草
わ引てそそり岨の桂の草
枝を花まんとせんもあま桂の草
二ふりそそりりあま桂の草
里をそそりあま桂の草
程もそそりあま桂の草
そそり甲はそそりあま桂の草
一まのうの中りあま桂の草
事にはそそりあま桂の草

桂 一 氷 之 枝 在
果 狐 和 回 木

紅梅

若草のしは花のちひさき
紅梅のしは花のちひさき
紅梅のしは花のちひさき
紅梅のしは花のちひさき

紅梅 逸 美 池
梅 竹 室 池

木 の 芽

紅松や 又さふ針子折るは
お松の太枝さうぬは付も元
お松押りさうぬは付も元
何をもさうぬは付も元

池のふりさうぬは付も元
お松の太枝さうぬは付も元
お松押りさうぬは付も元
何をもさうぬは付も元
お松の太枝さうぬは付も元
お松押りさうぬは付も元
何をもさうぬは付も元

松 千 大 千 史 子 風 木 坑 虚 白

蕨 の 身

茎 た ち

お松の太枝さうぬは付も元
お松押りさうぬは付も元
何をもさうぬは付も元

お松の太枝さうぬは付も元
お松押りさうぬは付も元
何をもさうぬは付も元

お松の太枝さうぬは付も元

一 由 而 抱 一 具

沙 松 呂 千

茂 根

草

川越るくは時をすしれく
徳りんくさ草くあさく
金の草のくさく
湿葉草を枯渡く
草朴のけく
あさくあさの垣

女折
永保
帝之
卓古
東漢

五

加木

徳も葉のくさく
あさくあさの垣

惟草
干輜

散草

たんちや中休く
あさくあさの垣

慈光

あさくあさの垣

黄山

土草

下宛西真子つむ
あさくあさの垣
あさくあさの垣
あさくあさの垣
あさくあさの垣

禾木
梅鳥
欽哉
沙鷗
砥山
千輪

木瓜

あさくあさの垣
あさくあさの垣

一具
梅草

芦角

芦の葉の通りに如く抄りて

南出

接木

昔は木も喰ひまじり極 講
念入しとて何接木のいづれ
飾りの接木とて何川彼邊
且た有りともなく接木我
自慢して強ひ接木の柄より
お送や接木用をしのむとて
下りともなく接木の柄より

此接木の柄より

古翠 波同 鷹志 山外 雲清 祖々 由哲 卓池

菜摘

菜摘

菜

花

菜の老もまじりや 菜摘
此年らをもまじりてすまじり菜摘
方丈の手拭もまじりて菜摘
くまじりや 年まじりて菜摘
まじりや 菜摘
菜摘の唄もまじりて菜摘

菜の菜の菜の菜の白の
菜の菜の菜の菜の白の
菜の菜の菜の菜の白の
菜の菜の菜の菜の白の

一具 多代七 徐翁 千粒 遠洲 雪慈 由菊 丁白 夜白 抱儀

種節

樞

葉の多や ねねて 葉の 華の 傘
あのをちよすふに あね 葉の 乃 完
葉の 葉乃 ちよ 枝つ ちよ 葉の 乃
あのをちよ 一 葉の ちよ ねせの つち

葉の 多や ねねて 葉の 華の 傘
あのをちよすふに あね 葉の 乃 完
葉の 葉乃 ちよ 枝つ ちよ 葉の 乃
あのをちよ 一 葉の ちよ ねせの つち

好物の 葉子と ねねて 葉の 華の 傘
あのをちよすふに あね 葉の 乃 完
葉の 葉乃 ちよ 枝つ ちよ 葉の 乃
あのをちよ 一 葉の ちよ ねせの つち

葉の 多や ねねて 葉の 華の 傘
あのをちよすふに あね 葉の 乃 完
葉の 葉乃 ちよ 枝つ ちよ 葉の 乃
あのをちよ 一 葉の ちよ ねせの つち

葉の 多や ねねて 葉の 華の 傘
あのをちよすふに あね 葉の 乃 完
葉の 葉乃 ちよ 枝つ ちよ 葉の 乃
あのをちよ 一 葉の ちよ ねせの つち

好物の 葉子と ねねて 葉の 華の 傘
あのをちよすふに あね 葉の 乃 完
葉の 葉乃 ちよ 枝つ ちよ 葉の 乃
あのをちよ 一 葉の ちよ ねせの つち

海棠

海棠の 日之を ちよ ちよ ちよ ちよ
あのをちよすふに あね 葉の 乃 完
葉の 葉乃 ちよ 枝つ ちよ 葉の 乃
あのをちよ 一 葉の ちよ ねせの つち

海棠の 日之を ちよ ちよ ちよ ちよ
あのをちよすふに あね 葉の 乃 完
葉の 葉乃 ちよ 枝つ ちよ 葉の 乃
あのをちよ 一 葉の ちよ ねせの つち

海棠の 日之を ちよ ちよ ちよ ちよ
あのをちよすふに あね 葉の 乃 完
葉の 葉乃 ちよ 枝つ ちよ 葉の 乃
あのをちよ 一 葉の ちよ ねせの つち

海棠の 日之を ちよ ちよ ちよ ちよ
あのをちよすふに あね 葉の 乃 完
葉の 葉乃 ちよ 枝つ ちよ 葉の 乃
あのをちよ 一 葉の ちよ ねせの つち

連

翹

連翹や 阿使多うのひびき
生え元や 一里程の身 樹の舟
連翹や 折る隙と花のあ
まの翹小 漆くらしきま元哉

九把 右行 槐村 蒼吼

梨花

散らけりいりあー 梨子の花
曇るくくく 人合の 梨子の花
一本三月 一り一 梨子の花

若池 晴水 佐良 若

虎状

再枝の 標う 持ち 此の 表

蒼吼

木蓮花

虎杖や 体むらり 赤の 赤の如
思ひ切の 嘆中く たり 赤き花
掃除くくく 赤き 庭や 赤蓮を

赤蓮 赤蓮

青麦

青きもの 赤く 残ら 一 赤麦を
青麦や 丁度 頃と 赤の 赤
も 赤中 一 つ 赤き 赤の 赤

由哲 大極

苗代

苗代や 村の 赤の 橋の下
苗代や 与る 赤の 赤の 赤
終る 中 赤の 赤の 赤代 四

由哲 一具 傍眺

山

苗代り滞りあはさるる南
苗代中すぬ水鏡を弄も
吾之山のくけりりり苗代田
苗代りをいふや且形寺

古春
素元
南雪
卓池

雪をちんく山松又吾も麓うり
虎杖のまはりあおらしむ
おとろくまけかきくわらし
悦みれよまの山甲 麓折
把事まてあふふらき麓武
あふ所といふ路のまをいふ

一月
在叟
真山
月暈
由指
松室

山花

あふりあふりあはく花の
花咲くもあふまき花の那

朱月
系漢

藤

藤葉中をうらしそぬ雨
あふ棚中あふりまはは
まはらふ藤をいふ
夕めりの遊い連わり藤の
やふり地へ布きさく藤の毛
あふらふ藤をいふ藤の毛
あふらふ藤をいふ藤の毛
月のまはらふ藤の花

多代め
葉靜
中誓
鵬居
一映
堪目
玄子
子執

山吹

山吹中... 山之井
 山吹... 氣...
 山吹... 氣...
 山吹... 氣...
 山吹... 氣...
 山吹... 氣...
 山吹... 氣...

一石
 函側
 志美
 運流
 景月
 一具
 獲如

了

了... 了...
 了... 了...
 了... 了...

風羽
 若非
 傳

鶯

鶯... 鶯...
 鶯... 鶯...
 鶯... 鶯...
 鶯... 鶯...
 鶯... 鶯...
 鶯... 鶯...
 鶯... 鶯...
 鶯... 鶯...
 鶯... 鶯...
 鶯... 鶯...

名雅
 少踏
 在輝
 松宮
 未水
 似年
 叢
 万族
 杜藝
 伯老
 之

猫乃癡

東の虎のしつゝにきり 猫の意
 虎ハ肺のけつをうと前 猫の意
 猫七すゝ初巻の 首の鈴
 其の猫をとりぬれぬと巻れど
 有りて先へ出さず 猫の走
 出さずと又さす 或るや 猫の猫
 猫の意をうの 水さ 跡
 所はのち晴気を けうかれ 猫
 あるれあく 猫や 巻をり 虎の 声
 ある 意の 女一色 尾をれ 身

風 竹
 林 曹
 助 堂
 桐 堂
 車 池
 漢 舟
 車 漢
 千 輪

白 魚

一 海り 先お 魚の 池 走 り け
 ふ 魚ハ 音を かりて 走る 所 那
 あ 下ハ 毛し 毛と 毛と 毛と 白 魚 成
 毛 魚 や とれ 毛 思 毛 網 糸
 毛 魚 や 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛
 白 魚 や 文の ぬき 毛 毛 毛 毛
 毛 魚 や 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛
 毛 魚 や 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛

漢 池
 漢 舟
 漢 舟
 漢 舟
 漢 舟
 漢 舟
 漢 舟
 漢 舟

鳥 乃 巢

海り 毛 毛 毛 毛 毛 毛 毛
 鳥 乃 巢
 鳥 乃 巢
 鳥 乃 巢
 鳥 乃 巢
 鳥 乃 巢
 鳥 乃 巢
 鳥 乃 巢

一 丈 十
 一 具
 一 具

親雀

子親

子親

尾在子之左也

野巢

雙極可也

雙鳥

養子之親也

名哲

雀子

雀子の

多代

嚙可也

加例

未と云き

千秋

雀子鳴也

沙鳴

雉子

雉子鳴也

鳴也

雉子鳴也

鳴也

雉子鳴也

鳴也

雉子鳴也

鳴也

雉子の

卓文

鳴也

漢音

鳴也

速例

鳴也

千秋

雉子の

卓池

鳴也

虛白

雲

雀

亦安きハ海の上よりハ切さうカ那
揚てかろこゆきそ字のゆとうらそ
高きや揚るをそよ風の先
何々うらゆや一日を舞いんり
星も出くおるよおふおぬまきそ
気のおもく連り別をてびんりそ
それきうにまてハ再直るをそかそ

真白 抱年 流芝 松秀 野菓 瞻石 蒼札

帰

雁

一むきとをねと強うや 帰る下
風きとく表を羽着りて帰る下
ゆきを尻りたるのちや川へえ
ゆくても飽て登降 池のふ
ゆけや表そしたる終の岸岸
田を買て標うりりかろつる下
厚の流表のそなきし表をまう
元の田へおしてまうる表の下
大船り帆をてまや帰る下
帰る下見ゆるまうる表をまう

乙子の飛きまのや 所つる
下したるそを轉りてむとそ身

大翠 極号 大松 極高 風朝 流芝 赤溪 千枝

太極 林曹 而后

玄

鳥

駢

玄出の意は馬の中を解つた

形不羽を捉へて以て雌雄を

以て之を母とす也 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

朝

鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

凡そ鳥は二仲の體に應ず 凡そ鳥

系

大

杜

草

五

月

一

春

句

鳥

係

年

一

具

速

沙

木

最

小

夷

若

竹

平
入る

蝶

ととをり入湖のまよふ那
多きりりぬ帳付もあふぬ
千帖

由雪

街通

多代の

抱保

山外

盛充

双鳥

共山

ひすくして細きや乾の蝶
初蝶や鳥の羽の端の端
風より身を任せき常々草の蝶
初蝶やあぢの上も又望ん
あえんつ蝶の眼よつくり和勢
あふ佳し時をも蝶の水の上
戸明老ハ蝶の世を以てあぢ
別々々々表して以て仲の蝶
いゝも蝶の世を以てあぢの蝶

蝶をのり舟中先平 ちのう

冬

厚くもつゆをこへゆが蝶を
人あふれ蝶遊ふりこあふま

岱年

千帖

杞

地あつちりもつ草をのちをたね
海をえて地の蒼々木の方身
唯せやる橋子を地の出さう

阜地

蒼輝

黄山

鋒

初鋒の葉をよ残るり糸う糸
鋒の葉の二の足とさう契の尻

昇化

慈光

観

ちととれて靴の掛りぬ 観うふ

得庵

蛤

蛤やむひの年を八傳しつゝ
明桶やをわつとくつ小

卓舟
東溟

田螺

送きぬつやうまをひ出ても四り
嘉波や田螺の明く表ある
子のふを先へるもや田螺賣
沖の船とく日如くもあつ田螺

而右
益山
可也

子へ取く是のこゝぬ 螺の車

卓池

蛙

蛙系へゆく 蛙のあつ 蛙身
ときれく 可蛙の啼つて
色はれの家をよもや 蛙蛙
月半の枯木やそつてあつ蛙
尾のとれて余の思へつる 蛙身
新蛙 蛙の 蛙の 蛙の 蛙の
そつて行行列なをる 蛙の 蛙
それとあつ 蛙の 蛙の 蛙の

小柳
大柳
月夜
言子
名竹
淡舟
出年
千輪

蚕

おくれ蚕もあき 年をうり 蚕の
まはつ 蚕の 蚕の 蚕の 蚕の
産卵のあつ 蚕の 蚕の 蚕の

年池
玄子
潜

小 點

舟のりやふくぬめり家をもり
 船をこぎておのりてきく家
 燈のあかりにまわく香のけ
 ちをくらふまのりておのりか

海にちりまのりぬ 魚のしづか
 夢ふちの酒をいぬぬし船身
 ちりまのりていぬぬし船身
 夢のちをいぬぬし船身
 夢のちをいぬぬし船身

舟のりやふくぬめり家をもり
 船をこぎておのりてきく家
 燈のあかりにまわく香のけ
 ちをくらふまのりておのりか

落 角
 櫻 調
 佐保姫

舟のりやふくぬめり家をもり
 船をこぎておのりてきく家
 燈のあかりにまわく香のけ
 ちをくらふまのりておのりか

舟のりやふくぬめり家をもり
 船をこぎておのりてきく家
 燈のあかりにまわく香のけ
 ちをくらふまのりておのりか

舟のりやふくぬめり家をもり
 船をこぎておのりてきく家
 燈のあかりにまわく香のけ
 ちをくらふまのりておのりか

舟のりやふくぬめり家をもり
 船をこぎておのりてきく家
 燈のあかりにまわく香のけ
 ちをくらふまのりておのりか

山 骨

む
支

死
ら
義
波

生
殊

左
義
長

綱
引

あるはうり人の出てあるむ月引
ふふれの音 波 じきむらきき
四月の中 つつとりの 杖 揮 條
四月の末の初 じし 中 坪 のうち
四月の中 先 那 なる 友 のふし

如月の中 たふひる 福る 山の毛
きけり 波 中 綱 を え 世 の 重きと大
月 赤も 思つと 出り 二月 身
と 徒も 意入 生 生 二月 哉
... 波 ... 生 ...

表をゆく ゆり 池 ... 波 ...
ふ月也 是 ... 池 ... 波 ...
ふ月也 是 ... 池 ... 波 ...

左 義 長 の 何 ... 池 ... 波 ...
... 池 ... 波 ...
... 池 ... 波 ...

... 池 ... 波 ...
... 池 ... 波 ...
... 池 ... 波 ...

... 池 ... 波 ...
... 池 ... 波 ...
... 池 ... 波 ...

社 驚
木 本
大 枿
波 崎
や ...

其 山
得 取
波 文
風 朝

小 松
風 石
大 枿

風 朝
丈 子
森 紫

風 朝
葉 軒

一 吳

霞

ゆきもあや不明か 薫る車
二二大地をそ航是る 雲 車
陽の町もきこゆをり 秋もみ
入社の一例くは かせん なる
まをを ぬてあをの 津いそあ
をぬく 浪きふまぬ 岸辺身
長橋のちぬあくく ぬ 人由り
ぬくき ぬ風をふた ぬあを
ぬぬきのま ぬもぬく ぬあ
沼あき 層をぬあて ぬ入ぬ
ぬぬ ぬぬぬぬぬ ぬぬぬぬ

花 春
一 舟
二 帆
三 旭
四 規
五 ぬ
六 水
七 白
八 了
九 在
十 由
十一 誓

朧月

舟の老をまきく 雲あけ 朧月
二ツツ 橋ちるまや ぬあ月
舟の舟 舟ぬけく ぬの 朧月
舟の舟 舟ぬけく ぬの 朧月
舟の舟 舟ぬけく ぬの 朧月
舟の舟 舟ぬけく ぬの 朧月

大 橋
二 舟
三 史
四 舟
五 舟
六 舟
七 舟
八 舟
九 舟
十 舟

風

あつれの秋風きりておのれ月
後くははたけてほくや秋月
たのほふ海のおもれや秋月
月夜て秋月秋の秋くくく
秋月秋中をよれいすこまし

秋風
二木
嵐外
連流
千輪

淡切くくまのあまや
岸の尾くまこくれてたる小笠原
まれば岸や霧よ霧よ霧よ太舟身
曲くまの岸よりたれまや風の音
ままゆきにはちくくくくくくくくく

淡物
其山
素屋
万籟
吟牛
吾池

岸のあまや秋風きりて

千輪

菽入

菽入やまきと橋ある程おのり
中入のちりてえまらや噂の物
菽入や橋つりたる小笠原
中入のちりてえまらや噂の物
菽入の橋つりたる小笠原
中入のちりてえまらや噂の物

年池
一甫
徐全
二丘
拙石
習之

餘

二

あまらの神おのれはる餘きり
あまらさうあまらさう餘きり
田のあまらさうあまらさう

養礼
花竹
木葉

春

春をこし 昔三飯の 春をこし
浦風を 浪をこし 春をこし
春をこし 春をこし 春をこし

卓池 雨堂 千款

酒

酒をこし 春をこし 春をこし
夕の 春をこし 春をこし
酒をこし 春をこし 春をこし

江山 鼎左 左城

暖

暖をこし 春をこし 春をこし
春をこし 春をこし 春をこし
暖をこし 春をこし 春をこし

惟草 九紀 万道

焼野

焼野をこし 春をこし 春をこし
春をこし 春をこし 春をこし
焼野をこし 春をこし 春をこし

一具 井智 丁出

山焼

山焼をこし 春をこし 春をこし
春をこし 春をこし 春をこし
山焼をこし 春をこし 春をこし

一有 五指 春翠 辰松 地係 千款

残雪

山里如 故きゆのちん 結ゆくを
かき出をい木の葉未帰く 残る雪

丁 小 栞

春

雪

冬心置りかからき 春の雪
雪をちるやをうくし 春の雪
あふあの上を解きまうし 春の雪
雪の雪の上より 春の雪
春の雪のたえぬあうりや 春の雪
あうりや 春の雪
あうりや 春の雪

佳 巖 額
文 松
とらぬ
一角
由 樹
白 起
蒼 札
東 眞

雪解

春風

春風吹や吹のふりうり 春の雪
春の雪のたえぬあうりや 春の雪
あうりや 春の雪

春風吹や吹のふりうり 春の雪
春の雪のたえぬあうりや 春の雪
あうりや 春の雪

沙 路
今 是
春 以
西 后
抱 像
未 月
松 什
素 撰
大 子

春風

志あらしくおねうあやまるん
 新の烟とんと捨少く春のうせ
 佳く年おとせられし春の風
 まく春の風はるくや春の風
 春の風や春をて再れは波
 春の風や春をて再れは波
 まく春の風はるくや春の風
 春の風や春をて再れは波
 春の風や春をて再れは波
 まく春の風はるくや春の風
 春の風や春をて再れは波

梅香
 山骨
 九記
 而后
 新魚
 車池
 伴兄
 大板
 千松
 嘉礼
 也

喜雨

春の風や春をて再れは波
 春の風や春をて再れは波
 まく春の風はるくや春の風
 春の風や春をて再れは波
 春の風や春をて再れは波
 まく春の風はるくや春の風
 春の風や春をて再れは波
 春の風や春をて再れは波
 まく春の風はるくや春の風
 春の風や春をて再れは波

大板
 一省
 漢舟
 沙路
 大五
 丁
 芝石
 大
 光
 茶

春日

春

春

節をわたりては春の節をわたりては

枝々あらはれもをりしとよのよひ

ひらり春や何れを枝の末の春

細子照るはさきんや春の春

さの春やまの春あるは春の春

とよの春の明枝あるまの春

とよの春や男の春やまの春

山うらぬぬまの春とよの月

下

林

籠

十

梅

南

雲

風

さの春やまの春あるは春の春

とよの春の明枝あるまの春

とよの春や男の春やまの春

山うらぬぬまの春とよの月

さの春やまの春あるは春の春

とよの春の明枝あるまの春

とよの春や男の春やまの春

山うらぬぬまの春とよの月

さの春やまの春あるは春の春

とよの春の明枝あるまの春

木

小

範

由

干

蒼

一

大

茂

風

水

春

今やとよの春も散るる春の名

とよの春の明枝あるまの春

とよの春や男の春やまの春

山うらぬぬまの春とよの月

さの春やまの春あるは春の春

木

小

範

由

干

蒼

一

大

茂

風

木

平池の類のありて水
さう方へ流れてはや春の
春の水あるあるを流れ
来たりてふけたれは春の水

平池
波岡
石巻

水
ぬすむ

折ひ先等の子供やあそむ
ぬすむむはや河田へ魚のり

才長
市枝

海
苔

海苔をよるや海苔の思ひ
惟松のふり替へさんつる
終極や松は海苔の持ひり

山外
助宣
平山

子
餅

豊定やあてはくは子餅
子餅やあてはくは子餅
はくは子餅は子餅の持ひり

風詠
弄化
一具

系
枕

いそぎ枕やあてはくは子餅
系枕やあてはくは子餅

獲物
桐壺

陽

陽あそび木の松を文家しき
陽あそびの下一押の大川

狂歌
草香

冬

あそび木の松を文家しき

悠

陽を中 乾交する所の とききん
かりうりうきん 今言はむ 陽大外

千輪

二日

逐うり隣し二日 亥少郡
画申きてきる 異なり二日 亥
門川年 不二のうり 中二日 亥

右橋
並光
大天

七

午つ

初年より 市代さるに 博くお
さる午より 始をさし 何の 仲の 略
初年和 海面へ さい 門の 向い
と川より さい 板橋の 造り 死

一 舟
風橋
若非
夷則

彼

岸

山里より 山の 麓の あり 彼岸 哉
宿りて 中より と 住む ひと 人 あり
昔より あり 猿も 彼岸 中 人の 舟

麓北
一 甫
千 輪

清忌

子供守り 子 孫を 是れ とう 清忌 の 鐘
是の 瓜より くり ます 中 け 是の 鐘

一 具
形 右

涅

槩

山中 中より 荒 壁より 縁より 人 係
呉の 中より あり とも さい 一 涅 槩 係
ねん 人 多し 中 さい 何の あり さい 出 け
本 係 さい あり さい 腕の 時 一 涅 槩 係

未 木
祖 々
旬 元

西行忌

素具酒くたてりて終世無常
手もまじりの世のけりて涅槃像

惟車
幸々

是よきりてそつらう西行忌
と出よ志と業のそつら西行忌

由誓
東雨丸

永

日

永よりや等身てふまゝ
堪よりやいね好みのまゝ日永
さうてもみ永きりを流の者
このまもむたえや流のり永くぬ
永よりや思ひのみよ流あし

風胡
去峰
仙峰
山外
風樓

出代

出代の出ひかきや
舟の 佐より 出代の 庵も
出代の 舟りり 舟も 出をりし
出のりの 枕のたて 一よつと

卓池
蘭表
笠史
組郷

雛

雛も 市の 足も
そつらあのおてまじり雛身
市雛や 花を ながし 立姿
雛のりを 出て 大ま 月の西上
とあつらふくあつらふの

風胡
出代
雀史
侍燕
芳女

鶏合

お茶さ〜〜煙りのとら〜〜籠うん
縁舟のや〜〜さ〜〜ひ〜〜あま
を〜〜子のつら〜〜や籠の棚
ま〜〜れ〜〜さ〜〜籠の籠
鳴れ〜〜舟のあ〜〜る〜〜籠
〜〜か〜〜まの舟のひ〜〜あ〜〜ら
籠籠やまも〜〜おれ〜〜西〜〜ま
お〜〜も〜〜た〜〜遠〜〜籠〜〜り〜〜也
あ〜〜な〜〜さ〜〜ゆ〜〜〜籠合

大樹 波文 負襖 楓下 岳凡 山外 蓮宇 映非

汐干

お茶さ〜〜の〜〜あま〜〜汐干
お茶さ〜〜の〜〜あま〜〜汐干
お茶さ〜〜の〜〜あま〜〜汐干
お茶さ〜〜の〜〜あま〜〜汐干
お茶さ〜〜の〜〜あま〜〜汐干
お茶さ〜〜の〜〜あま〜〜汐干
お茶さ〜〜の〜〜あま〜〜汐干
お茶さ〜〜の〜〜あま〜〜汐干
お茶さ〜〜の〜〜あま〜〜汐干
お茶さ〜〜の〜〜あま〜〜汐干

松竹 速淵 茶幹 卓池 右表 東枝 千輪

長閑

お茶さ〜〜を〜〜あめ〜〜から〜〜る
お茶さ〜〜を〜〜あめ〜〜から〜〜る
お茶さ〜〜を〜〜あめ〜〜から〜〜る
お茶さ〜〜を〜〜あめ〜〜から〜〜る
お茶さ〜〜を〜〜あめ〜〜から〜〜る
お茶さ〜〜を〜〜あめ〜〜から〜〜る
お茶さ〜〜を〜〜あめ〜〜から〜〜る
お茶さ〜〜を〜〜あめ〜〜から〜〜る
お茶さ〜〜を〜〜あめ〜〜から〜〜る
お茶さ〜〜を〜〜あめ〜〜から〜〜る

由菊 鳥谷 壺天 波回

惜春

薄氷や やはらぎとて 春をいむ
跡新しき 春をいむ 心も春をいむ

文翠
信着
かま

行

喜

川も春や 身をいそぐ 舟橋の上
ゆく春や 身をいそぐ 舟橋の上
ゆく春や 身をいそぐ 舟橋の上
ゆく春や 身をいそぐ 舟橋の上
ゆく春や 身をいそぐ 舟橋の上
ゆく春や 身をいそぐ 舟橋の上
ゆく春や 身をいそぐ 舟橋の上

千
子
梅
木
舟
橋
上
舟
橋
上
舟
橋
上
舟
橋
上
舟
橋
上
舟
橋
上

喜 細 節

昔の春のよきと 花のよきと 春のよきと
昔の春のよきと 花のよきと 春のよきと
昔の春のよきと 花のよきと 春のよきと
昔の春のよきと 花のよきと 春のよきと
昔の春のよきと 花のよきと 春のよきと
昔の春のよきと 花のよきと 春のよきと
昔の春のよきと 花のよきと 春のよきと

一
具
吟
霞
鹿
由
哲
丁
春
子
年
松
竹
春
見
梅
香
水
久

河形傳や人よわらむに松の
隙らうとまゝのささくや花の
後 炉即ち支の意が案に降るは
味のはめる意や花のなきると
まゝのものをささくは

卓地
松竹
逸淵
護物

古物
梁州大町越後屋
大伴定部

今人五五松花夕集

時 鳥

夏之部

八雲 東漢
涉驛 千輪

軒 技

麦の舟の舟もささくは
子親中の和歌也一松短し
河和ま門て飛らむをね杜行
松ささくは舟もささくは
とまゝの中は花有り初見塊
何とる春折之ま風りあ
まゝのりての競や花ささく
新云をりては花やささく

一序
鳳朗
虚白
玄子
岱雲
呂建
松儀
美礼

時をばくすまね 時々のなり
 秋あふる月の雲より故郷へ
 さつねおのころきつて 甲時を
 移るるの夜はわらわや 時を
 きく念をたれて百をう 郭へ
 海へ風を 傘へ被るはまに
 子五のやうけものこね とき
 年より年のあきよ 時を
 尾へあまを案じつと 郭へ
 時をひきて 狸 森入りの年
 時をひきて 時をひきて 時を

山池
 卓外
 卓丈
 五株
 六二
 錦露
 悠々
 應々
 阜即

ありくとまをそのはげや 時を
 以先ハ何をその秘多より 郭へ
 時をひきてあうてりき 時を
 時々の多きあふるいあふる 時を
 産き 時々の風 一海や 郭へ
 雨歇や 時々の 時々の 時を
 時々の 時々の 時々の 時を
 いくくの 時々の 時々の 郭へ
 時々の 時々の 時々の 時を
 時々の 時々の 時々の 時を
 時々の 時々の 時々の 時を
 時々の 時々の 時々の 時を

山池
 卓外
 卓丈
 五株
 六二
 錦露
 悠々
 應々
 阜即

しつては... 郭...
... 杜...
... 魂...
... 郭...
... 田...
... 口...
... 氏...
... 千...

千輪
五海
曲阜
古介
若人
若水
林曹
若水

閑

古鳥

老鶯

山柳... 橋... 見... 川... 老... 鶯...
... 千...

千輪
無六
雞年
大極
其山

老を... 鶯... 川...
... 千...

千輪
若水
若水
若水

常子老とほくやまをよ

仙水

雀

けし子雀とくも子ハ
雀
雀のついでをえぬ里やけし子
けし子のちも鳴らんけし子
けし子やちやちやけし子のま

雀
雀
雀
雀

鶯

川きみのあやをれり日
川きみややのふたのあき

鶯
鶯

鶺鴒

鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日

鶺鴒
鶺鴒

鶺鴒

鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日

鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒

鶺鴒

鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日
鶺鴒のあやをれり日

鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒
鶺鴒

騙

幅

鞍

子

是ももあつて掃出を所とて身
ふつと風のつるをとも 堂

幅幅や土橋の裏をまゝきき
かゝあつて逐てゆき行状アヤ
辨幅アヤおぬをねる風の巾
くくわつて和の橋をく門の口
掃幅也市才又くく門の橋

端の子の初もくくふくし理いさ
端の子の初もくくふくし理いさ
端の子の初もくくふくし理いさ

大橋
千輪

杉高
之岳
丁知
彼回
一肖

江月
小柄

枝蛙

毛虫

子子

丑

枝蛙言の竹ももあつて枝蛙
枝蛙言の竹ももあつて枝蛙

毛虫すく先や毛虫のニツすて
毛虫すく先や毛虫のニツすて

子子子子子子子子子子子子
子子子子子子子子子子子子

子子子子子子子子子子子子
子子子子子子子子子子子子

山形
燕尾

水瓜
太珉

梅高
五株

車池
野菜
米吳

蠅

水馬

虫より等しつゝぬきおや竹の奥
飛せしのほむそあつゝいふもあつぬ
ゆゝあつゝの思ふ故地や 巻一ツ

懐赤くまけし松より 斬くを
下りりり 其てくくし馬の腫
沸くきりり 赤く赤くぬきぬき 蠅
兄まよとまよえくむくす 蠅二ツ
遠くをよと遠く 病もや接の 蠅

丁
一 具
千 輜

湖 山
桐 壘
卓 池
虚 白
董 山

蚊

赤んや蚊の蚊ぬ里の蚊の音
庵の園をめては皆蚊よさるる
法華の海を赤をいひ蚊蚊の
さく蚊蚊の怪くも言う 蚊三ツ
今されぬ蚊もいふくつて蚊蚊
蟹の蚊のさくくくくくくく
赤庵のくくくくくくくくく
舎敷の木の流む色ハ群く蚊蚊
蚊の中より赤くもひくくくく
さくくくくくくくくくくく

以 馬
梅 家
知 芝
洞 天
若 非
漢 高
其 四
運 派
得 安
千 輜

故柱

故柱や通てくれハ通てくれ
故柱やらやあるとくハ通てくれ

葵礼
鳥仙

故遣

一つはあつたむねの故をいふ
人のたつたむねもあつた故をいふ
木はあつた故をいふや、庭の裏
持てあつた故をいふや、故をいふ
人のあつた故をいふ故をいふ
元船のあつた故をいふ故をいふ
葉のあつた故をいふ故をいふ
故をいふ故をいふ故をいふ

葵礼
博取
卓文
西村
海芝
双鳥
文叶
大鴨

蝸牛

碎きあややあつた故をいふ
故をいふや、あつた故をいふ
故をいふや、あつた故をいふ
故をいふや、あつた故をいふ
故をいふや、あつた故をいふ

一具
田風
土言
夫梨
雪公

蟬

通てあつた故をいふ
通てあつた故をいふ
通てあつた故をいふ
通てあつた故をいふ
通てあつた故をいふ

松意
湖山
牛外

鹿の子

鳴るのひりめきうまぬ松り
まじくともさせぬ位わや塔の
せみ鳴り向敷の音かきさる
あからしつ茶をていけぬ塔の
わらう摺をきゆそ飛ぶまぬの
あたらん尻はとくむかの子
踏まきしつ其後ハ其ぬぬの
照らすのふ親よ似る席の子
拍子のきをうしそある席の子

由留
竹舎
席史
千輪
馬谷
完徳
荻礼
喜鹿
茂桂

打
虫

更衣

兜をきくそあるや打虫を
鳴るはあつて通ぬ打虫を
まじくともさせぬ位わや塔の
あたらん尻はとくむかの子
踏まきしつ其後ハ其ぬぬの
照らすのふ親よ似る席の子
拍子のきをうしそある席の子
あたらん尻はとくむかの子
踏まきしつ其後ハ其ぬぬの
照らすのふ親よ似る席の子
拍子のきをうしそある席の子

大掛
一函
卓池
土糸
抱儀
由留
末木
鹿

医考にて先考成るや久石

風洞

給

左師... 高... 藤... 松... 松... 大... 桐... 若... 林...

梅... 茶... 升... 松... 松... 大... 桐... 若... 林...

青 簷

男... 松... 青... 多... 組... 風...

多... 組... 風...

お

り

悪... 仲... 夏... 尺... 舞...

助... 板... 鳳... 英... 一...

葵祭

早稲のやむかしのやと葵のやむかしのや
くらげのやむかしのやと葵のやむかしのや

葵金
腰兼

知月

早稲のやむかしのやと葵のやむかしのや
くらげのやむかしのやと葵のやむかしのや
左今を比其凡のやむかしのやと葵のやむかしのや
村通のやむかしのやと葵のやむかしのや

葵礼
抱儀
年供
松崎
秀人

さ

梅おろし 風音 庭へくくろ 草月 葵

大梅

水世月

五月やあれん 露もあきさ 面をうり
六月や葉とさうの 裸 ちま
七月やまの身も 水の音
八月は 秋も 実きうぬ川の冷
九月は 月や 雲もあきさ 垣の花
十月は 月の 輝もあきさ 供もさう

双鳥
史千
松緑
太之
露谷
由哲

夏花

早稲のやむかしのやと葵のやむかしのや
くらげのやむかしのやと葵のやむかしのや
左今を比其凡のやむかしのやと葵のやむかしのや
村通のやむかしのやと葵のやむかしのや

布也
秋水

百本

打火とて冷るらんりり 百本

祖々

蓮佛

蓮佛とてや 蓮佛とてや 蓮佛とてや

盧白 節之 文昇

花寺堂

花寺堂の 花寺堂の 花寺堂の

護物 得取 蓮佛 台見

築紫

築紫の 築紫の 築紫の

得蕉 築金 幸舎

大矢

大矢の 大矢の 大矢の

蓮宇 遲流

短夜

短夜の 短夜の 短夜の

錦枝女 逸洲 點也 白樹

青

夏の秋や 明てりし 雲の 芳
経ぬ やる ぬらり 龍の 花
みよ ぬらり 念ふ ぬらり ぬらり
明あふ ぬらり ぬらり ぬらり

田所 下知 雀豊 梅室

麦

夢さし や 客さし 納戸口
夢さし や 月の ぬらり ぬらり

曾見 二風

宮寺も ぬらり ぬらり ぬらり
梅さし ぬらり ぬらり ぬらり
麦ぬらり ぬらり ぬらり ぬらり

由哲 波因 梅史

新茶

冬用と ぬらり ぬらり ぬらり
たり ぬらり ぬらり ぬらり

由哲 松裡

鯨

さ ぬらり ぬらり ぬらり
梅さし や ぬらり ぬらり ぬらり
一夜 ぬらり ぬらり ぬらり

一函 波因 号元

松魚

夢さし ぬらり ぬらり ぬらり
水さし ぬらり ぬらり ぬらり
梅人 ぬらり ぬらり ぬらり

信年 姫山 信石

鯛

多々入る地産するに多し柳
くわらわく客まがらふに魚も
信のよめて 連しぬま川 ころも
おまきく 又ゆりり初年 初年
とら 松魚素 買ふの人系 妙形

此より入及新あるに松松く年
信のよめて 連しぬま川 ころも
おまきく 又ゆりり初年 初年
とら 松魚素 買ふの人系 妙形

白桂 護物 鹿白 山外 干船

阜池 氷花 淡吉 多代め 甫川

幟

まをれハ蘇りノ尺巾のありあ
男よハ志もあつて子巾を何幟
候え何 子巾のなる坂の上
ふきぬん中を指すもぬまぬ候牙
町舟をひひきお家のむちりうを

前幕や 丁末をのりて 旗
ふくとゆり巾 李魚とて 七
うね 幕や 旗とあつて 幟

溶く女 六俾 太老 波回 茶山

梅意 逸閑 阜池

糶

地赤

競馬

わいふやわあといふ異一巻 糶
陸風のふく遠路をちぢたりの
解やういふ人のいふ所を糶り糶

由蘭
波田
里教

たもとりのうけをまらぬ地赤
かけひきの者まをりやまぬ

産光
信清洋

あまのうへに優美ありて
我があふ人のあつたてて馬

牟池
松石

あまのうへに優美ありて
我があふ人のあつたてて馬

風閉

おとすておとすておとすておとすて

五月 兩

おとすておとすておとすておとすて
湯の油をけりて若くは五月
やう木のお葉はまらぬ五月
おとすておとすておとすておとすて
五月は初湯の香の徳の考
おとすておとすておとすておとすて
五月は初湯の香の徳の考
おとすておとすておとすておとすて
五月は初湯の香の徳の考

一肖
求葉
送潤
下托
壺天
湯無
由蘭
一具
枯通
手輪

入

梅

一日ハササキ... 志ハク... 入梅... 五月...

大梅 梅山 南漢 菊枝 赤漢 十...

虎

兩

五月

常より... 虎... 梅...

獲物 里松 茶...

夏月

夏

中... 夏... 梅... 五月...

山... 斗... 其山 一岸 由... 于...

何... 大名... 夏...

木水 大笑 江月

五

五山の四五丁をひらき清きりか
あつ四丁一まきを中をさるる

五橋
丁

火

五中へは悩まひきり火津へ
足元のありきり火津へ
樹の幸火津子さうりかきさう

火
舎用
雙物

田
植

植のあふるあるぬえま田植へ
ゆきけり斜りあぬ田植
植へんと田中のあゆむ行のり

田
年池
由哲
若根

早

乙女

早

苗

乙女のおまけなりをさるる
乙女の子をさるる
乙女のおまけなりをさるる
乙女のおまけなりをさるる

一具
橋五
春結
声枝

月細くはらぬ田中苗へさう
一つはらぬはらぬ早苗
苗のあゆむ一まきをさるる

一具
一形
楓下

青田

山ありてまゝの枝のたぐさきもあはれ
まゆらふらぬ程の風もいふ早苗
かたきある苗やあゆみの木くさ
あまきくもあまきりも枯るる
伸あつりくゝいもまう田うぬ
何れらあまきりもあまきりも
綿くわいも程々のいふまう田
風あつりくゝいもまう田
あまきりもあまきりもあまきりも
あまきりもあまきりもあまきりも

湖山 古先 林金 鳥津 蒼乳 意 風 月 宇 千 輪

田州取

扇子

園扇

梅の枝のたぐさきもあはれ
まゆらふらぬ程の風もいふ早苗
かたきある苗やあゆみの木くさ
あまきくもあまきりも枯るる
伸あつりくゝいもまう田うぬ
何れらあまきりもあまきりもあまきりも
綿くわいも程々のいふまう田
風あつりくゝいもまう田
あまきりもあまきりもあまきりも
あまきりもあまきりもあまきりも

梅の枝のたぐさきもあはれ
まゆらふらぬ程の風もいふ早苗
かたきある苗やあゆみの木くさ
あまきくもあまきりも枯るる
伸あつりくゝいもまう田うぬ
何れらあまきりもあまきりもあまきりも
綿くわいも程々のいふまう田
風あつりくゝいもまう田
あまきりもあまきりもあまきりも
あまきりもあまきりもあまきりも

梅の枝のたぐさきもあはれ
まゆらふらぬ程の風もいふ早苗
かたきある苗やあゆみの木くさ
あまきくもあまきりも枯るる
伸あつりくゝいもまう田うぬ
何れらあまきりもあまきりもあまきりも
綿くわいも程々のいふまう田
風あつりくゝいもまう田
あまきりもあまきりもあまきりも
あまきりもあまきりもあまきりも

夫 翠 壺 白 氷 孤 玄 子 千 輪 梅 富 幻 外 庭 芝

紙帳

新中色をくく申社たうくあふふあふ
挿を客へさくくあふふあふあふ
ははそあの上あふあふあふあふ

蕉 素 五

夏羽勢

初うけく薩持ふれ 半帳あ
起されああああああああああ
ああああああああああああ
ああああああああああああ
ああああああああああああ

味 苦 心

帷子

統持く帳ああああああああ

旭 例

祇園會

初宿をまやああああああああ
初宿をまやああああああああ
初宿をまやああああああああ
初宿をまやああああああああ
初宿をまやああああああああ

奥 藤 真 英 暮
里 金 祇 火 律

雲の峰

雲の峰の押切たうああああああ
雲の峰の押切たうああああああ
雲の峰の押切たうああああああ
雲の峰の押切たうああああああ
雲の峰の押切たうああああああ

龍 著 一 五 一
風 札 月 五 一
子 札 月 五 一
一 嘯

氷室

暖くたる露のさかへんやさきの

そつとくらのんらよきよ氷の音
みちるゆる葉さく氷室の積る身
あふ葉のまきむらやな氷

千粒

氷松
護物
逢源

富士

士詣

みりあふくゆまきじし不三結
くの葉のちくあひなり不三結
月くりのあふさるえき不三結

由野
大勝
卓池

ふもや熱くあふくくくくくく

沙路

ふもや熱くあふくくくくくく

石見

ひる

網の焼座の冷しそ空揺るぬ
空揺るし熱くもあすそあひ

梅亭
千粒

土用

接ぐよとち中とのくあし土用舟
何中ふくあし土用舟

漢島
依者
西本

出干

岩やふみか人字何ぞそ土用干
赤松垂るのけくくはぬ土用舟
暖くあふくあふくあふく土用干
吾干や本のいんもくあふ

山崎
大奉
自越

一夜酒

ぬき人なりと云ふれり一夜酒
待りまきし子八家美女つら

茶山 湖山

暑

うらみなりまをねこころ暑
柄の産ぬきく涼なる暑身
難の熱くよつ咽山あつさう
向の暑字程何つ一組の元
大助子客といふと暑身
以暑者客の名まふあつさう
身はつら子扱はあつさう暑式

風帆 一函 景文 大翠 波文 史子 露泉

夕立

暑波屋の入り居る暑
強ひけてうせをりるつら暑
門先りまのあつさう暑う

山 市

夕立やと暑先し出る水取
中つらもの熱中さむちの生
晴らふと夕立やつら
あつさうの暑もあつさうは暑
夕立やと暑先と暑の暑
中つらもの熱中さむちの生
あつさうの暑もあつさうは暑
夕立の暑つら

車池 大翠 抱依 花文 一函 重竹 由野

簞

竹

ゆめをやはらぐはなをこきりて
ふゆのやまをのり人のけりふた
たまやふきをゆきゆきのま
ゆきゆきやゆきゆきのけり

魚のまぬ水まき
木決のまきゆきゆき
年ちりのけりゆき
別髪の上をゆきゆき

直人てんききききき

月々のまきゆきゆき

意

可也

目見

千輪

車池

素瓊

年緒

水并

竹

正
み

月水の旧條子かきまきみ
月涼しく風きく影りけり
あつちりともちりもてんてん

涼さやあまのけり
着つきの正印や涼の火
涼さくまきや涼さく
そんちりゆきゆきゆき
けりゆきゆきゆきゆき

まき風やぬ

茶礼

下知

悠

やらぬ

天花

悠

具

野

主

而

川流の...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

田見
斗送
太左
鳥津
淡
梅通
風洞
梅志
千執

蕉

青嵐

心太

...
...
...
...
...

...
...
...
...
...

...
...
...
...
...

蕉
東
浪

呼
梅
東
浪

由
風
大
琴

打水

打水の爲におは嬉しむ。極清
赤水のり。さうさう。や。未。と。ま。

林昔
主河

瓜

くわ。くわ。瓜の。白ひや。極元
り。底。了。月。ま。つ。瓜。和。瓜。の。香。

一果
極通

冷瓜

ちいさ。細。き。好。く。と。ま。和。冷。瓜
庭。丁。も。冷。し。て。ま。や。瓜。の。信。

小養
善北

沖鱈

喰。き。し。し。れ。を。入。る。沖。鱈
此。も。ち。の。さ。さ。さ。さ。を。沖。鱈。

江之
波回

清水

子。供。等。の。根。葉。の。切。り。は。あ。か
さ。さ。さ。さ。香。嬌。し。き。扱。つ。清。水。也
是。厚。く。の。安。さ。も。た。ず。瓜。の。清。水
飲。く。ま。士。の。ま。ま。あ。る。ま。ま。の。瓜
村。外。の。も。れ。す。し。ま。ま。ま。ま。の。ま
い。さ。さ。さ。い。さ。ぬ。さ。さ。や。甘。の。清。水
さ。さ。さ。と。海。は。さ。さ。さ。の。清。水。う。水
戸。極。と。け。て。肉。の。あ。う。色。も。は。水。年
清。も。ま。ぬ。人。の。ま。ま。ま。苦。志。と。の
も。ま。ま。ま。ま。ま。ま。清。水。も。ま。ま。

車池
袋手
風洞
一西
向夕
夷利
圭市
由南
極南

葛水

葛水や 生るつきの鳥つゝい
狭き川に 水は火の 池をうらむ

定保
相云

晒井

さししや 葉をてきくまの 洗
はらしめ 池一りたれる 樹の幸

律石
禾木

夏

瘦

夏夜の 月をふりや 海をくへ
あつた 夜や くらとまをくへ 角力取
高き 夜や 業耀を 似るも 業あるの

最支
左斌
右元

小舟

川舟や 花堂の 舟をふむ

由柳

秋

近

むらむら 瓜の 差んを 秋近し
秋をくあや 杉風 萩の 舟
秋近し 寺の 藪より 舟の 森
秋をくあや 徳持や 徳を 元はし

一具
紫峰
古眼
禾木

津 板

津をけし 神や 津板の ちき物
あつた 板や 津板の 終も 一凍
秋田より 舟の 津板の 津板 舟
若柳 舟の 投りし 津板 川

茂権
九氣
一眉
甚豊

舟をくあや 舟の 津板を 投りし 津板 川

千結

茅の端

誦、味も此邊よりいふ茅の端の
中と先より何と何と云ふちのこふ
葉より何と何の端ある茅の端の

若葉

法接ふりより又その若葉の
境内の境よりいふ若葉の
何よりいふ若葉の
その若葉も若葉の
若葉の若葉の若葉の

葉

櫻

たゞしとていふ若葉の
若葉の若葉の若葉の
若葉の若葉の若葉の
若葉の若葉の若葉の
若葉の若葉の若葉の

葉は九らふ若葉の
葉櫻や戸の若葉の

風 枕 大 子

杜 由 白

風 光

斗 知

大 松

送 閑

東 漢

風 納

一 具

新 楓 美 樹

其を備まきり穿つてわら楓
 りの飛 赤ふのきめふと逢かぬ
 糸うらふらふ起て面衣の若楓
 美久して庭をむらも木きりて
 滝の畔もさうり字ゆる新樹の
 色とけを濡れまを新樹の
 河中つちと楓洗ふ 志きりて
 着るうら庭ゆく風の 楓つき

推 什 起 回 木 木 千 輪 四 風 素 行

志 木 閣

あも中てあも新樹の志きりて
 葉の片のあてさきけ 茂りて
 かし家の中へ葉うら楓志きりて
 踏とててとつと程出を茂りて
 楓明るる葉きりて 茂りて
 海へ出るさうり字ゆる木 下書
 人木ねえ舞も何とを木を木
 鳥眼さうり字ゆる木 下書
 美き身の身きさるれき木 下書

楓 水 後 風 網 抱 像 兄 水 外 而 后 風 網 江 月 山 落 木 下 書

夏
本
立

夏一の村にて夏や夏本立
水くけし夏柳より夏本立
夏吹く花も夏や夏本立

夏一
本立

常
葉
本
葉

常葉本の常葉をかし建ち寺
お身のふゆりし松の常葉哉
二三つ常葉もあつても散れ七

常六
常山
常山

桐
花

一里を歩くと桐のや桐の花
お身のふゆりし桐の花
桐のふゆりし桐の花

桐一
桐下

葉
の
花

葉のふゆりし葉の花
葉のふゆりし葉の花
葉のふゆりし葉の花

葉花
葉花

葉
柳

葉柳のふゆりし葉柳の花
葉柳のふゆりし葉柳の花
葉柳のふゆりし葉柳の花

葉一
葉二

抽
花

抽の花のふゆりし抽の花
抽の花のふゆりし抽の花
抽の花のふゆりし抽の花

抽九
抽九

夏七

喜

梅

計年の何處にあり花梅本

まき梅の花をむやみのうすひ
井の根のまきも本うこむれ梅
まき梅う少き也一ふちこく

棟

まき梅う牛車をちう物そりふち地
まき梅う似ぬ梅ふくむや花梅
四へまき梅う根を我う何花梅

栗
花

りり色う花梅うえを栗の花

合款

花

まき梅う真のうこれ合款の日有式
日ハ七り合款を時計よまき梅
明くまき梅う花梅合款の花
わむの花ハまき梅う白くう

霞

子

まき梅う枝のいちを管もまき梅
まき梅う凡おれアまき梅うまき梅
まき梅うまき梅をうらぬまき梅
まき梅うまき梅の中ある地い

未
月
五

別
得
火

卓
大

曲
枝
木

子
完
小

牡丹

牡丹の花はさかたさかたせむるを牡丹の花
あつちり〜と〜と〜と〜と牡丹の花
日さすけてゆり〜と〜と牡丹の花
物さすり〜と〜と牡丹の花
息のい〜と〜と牡丹の花
一〜と〜と牡丹の花
〜と〜と牡丹の花

素行 角 卓即 得眠 運派 曲哲

芍薬

芍薬

芍薬

芍薬の花はさかたさかたせむるを芍薬の花
芍薬の花はさかたさかたせむるを芍薬の花

芍薬の花はさかたさかたせむるを芍薬の花
芍薬の花はさかたさかたせむるを芍薬の花

芍薬の花はさかたさかたせむるを芍薬の花
芍薬の花はさかたさかたせむるを芍薬の花

大根 芍薬 丁加 波田

知化

知化 史子 千根

如の花

子菽

如の花や物事の...
如の花や物事の...
如の花や物事の...
如の花や物事の...
如の花や物事の...

菽子持て呼...
菽子持て呼...
菽子持て呼...
菽子持て呼...
菽子持て呼...

由哲
大梅
湧瀧
木

何望
梅通
沙路
卑池
套机

淡花

菽

菽子持て呼...
菽子持て呼...
菽子持て呼...
菽子持て呼...
菽子持て呼...

菽子持て呼...
菽子持て呼...
菽子持て呼...
菽子持て呼...
菽子持て呼...

林曹
大老
一具
梅意
子菽

月想
何望

伝書
ふふ

朱乃子

朱乃子を搗て煮るや湯を
朱の子を煮て煮るや湯を
朱の子や煮るや湯を
朱の子を搗丹湯や人たより
朱の子や一掴いちお入るより
朱の子を煮るや湯を
朱の子を煮るや湯を
朱の子を煮るや湯を
朱の子を煮るや湯を

節 逸 淵 梅 室 蓬 干 蓬 湯 眉 山 東 漢

茄子

柴をわけて煮るや湯を
柴をわけて煮るや湯を
柴をわけて煮るや湯を
柴をわけて煮るや湯を
柴をわけて煮るや湯を

九 山 山 山 山 山

空豆

空豆を煮るや湯を
空豆を煮るや湯を
空豆を煮るや湯を
空豆を煮るや湯を
空豆を煮るや湯を

月 底 粗 文

小豆

小豆を煮るや湯を
小豆を煮るや湯を
小豆を煮るや湯を
小豆を煮るや湯を
小豆を煮るや湯を

水 休 得 菘

百合

百合を煮るや湯を
百合を煮るや湯を
百合を煮るや湯を
百合を煮るや湯を
百合を煮るや湯を

其 則 有 未 物 物

紅花

橘をば 葉をば 花をば
あつたはらば 葉をば 花をば
あつたはらば 橘をば 葉をば 紅花

紅花
あつたはらば

夏葉

あつたはらば 葉をば 花をば
あつたはらば 橘をば 葉をば 紅花

夏葉
あつたはらば

撫子

あつたはらば 葉をば 花をば
あつたはらば 橘をば 葉をば 紅花

撫子
あつたはらば

橘

あつたはらば 葉をば 花をば
あつたはらば 橘をば 葉をば 紅花

橘
あつたはらば

著莢

あつたはらば 葉をば 花をば
あつたはらば 橘をば 葉をば 紅花

著莢
あつたはらば

晝

あつたはらば 葉をば 花をば
あつたはらば 橘をば 葉をば 紅花

晝
あつたはらば

顔

あつたはらば 葉をば 花をば
あつたはらば 橘をば 葉をば 紅花

顔
あつたはらば

か
く

松の枝りくそそ花を咲かす
くそそ花の枝やまきくそそ花の才

一
錦

紫
陽
花

紫陽花の葉や浅くある湖の上
あまの葉や浅くある湖の水
紫陽花の葉や浅くある湖の水
あまの葉や浅くある湖の水

一
倉
彦
彦

夕
顔

夕顔の葉や浅くある湖の上
あまの葉や浅くある湖の水
夕顔の葉や浅くある湖の水
あまの葉や浅くある湖の水

一
太
目

藤
花

藤の葉や浅くある湖の上
あまの葉や浅くある湖の水
藤の葉や浅くある湖の水
あまの葉や浅くある湖の水

一
風
相
護

洋

洋の葉や浅くある湖の上
あまの葉や浅くある湖の水
洋の葉や浅くある湖の水
あまの葉や浅くある湖の水

一
若
折

蓮

河が、川のほとり、蓮の花、白く、青く、赤く、

車池

あやめ

あやめ、水の中、花、白く、青く、赤く、

対山、梅宮、湧滝、荻風、夷則、碩布、水松

川

河、水、流、く、

碩布、水松

葦

葦、水、中、

其友、芦意

蓮

蓮、花、白く、青く、赤く、

多代め、大梅、龍外、蓮宇

舟、海、

葉

葉の蓮の花を白く染めたる
葉のや語を起すは一あるも
庭深き蟻鳴りて葉の音を
蓮は一く河に風を運ぶ
掉りたる風情よあらば葉は毎
々海に流れてゆく葉の音を
花の気養丸は葉のにおほれり

新池より四五枚蓮の葉葉を
まきのよのちちて葉の音を

由 下
在 叟
五 吳
葉 金
相 我
葉 便
卓 味
郎 重

沈

林

石

釣
忌

和

十

沈むや若柳はし田の多り
海原や沈まるとのまの光

石葉よりさしと月の中
石のくさる葉は中らさるる

庭よりし風の音なりやうと
枝まんと家の石とや石を

葉の中を影くさる葉の音

葉の中を影くさる葉の音

沈物
千 終

去 曼
一 了

釣 願
去 石

山 樹
小 柯
池 心

以。治世。九年。九月。廿七日。

治世九年。九月。廿七日。石塚。再。三。記。行。

金。四。葉。月。入。比。之。信。入。

三。有。在。氏。真。子。石。

... 月 ... 治世 ... 九月 ... 廿七日 ... 石塚 ... 再 ... 三 ... 記 ... 行 ... 金 ... 四 ... 葉 ... 月 ... 入 ... 比 ... 之 ... 信 ... 入 ... 三 ... 有 ... 在 ... 氏 ... 真 ... 子 ... 石 ...



Handwritten characters in black ink on a piece of aged, yellowish paper.

Handwritten characters in black ink on a piece of aged, yellowish paper.

Large, faint, and mostly illegible handwritten characters in black ink on a dark blue, heavily worn and cracked surface. The characters appear to be arranged in vertical columns.

買之証

心法舟年十月廿

本所之物凡舟下空六

或舟之金三櫃業也

持一平有度坐車

以瓜其芽

大文部部

時維之秋

花月

和事六

曲十家

皇皇

弦回雅

曲文外

皇皇

細林

六七文

乙川

乙廣權

七和家

甚志

乙新義

七和家

送火

八堂儀

八柳經

養法

乙生財

九金の家

和瓜

一和家

一殘書

卷十

川

ゆくと	平四早	平五	平六	平七	平八	平九	平十
木屏	平五木の夏	平五	平六	平七	平八	平九	平十
木の子	平五	平五	平六	平七	平八	平九	平十
虫	平七	平七	平八	平九	平十	平十一	平十二
秋の蟻	平五	平五	平六	平七	平八	平九	平十
平五	平五	平六	平七	平八	平九	平十	平十一
心	平五	平五	平六	平七	平八	平九	平十
平五	平五	平六	平七	平八	平九	平十	平十一
平五	平五	平六	平七	平八	平九	平十	平十一
平五	平五	平六	平七	平八	平九	平十	平十一
平五	平五	平六	平七	平八	平九	平十	平十一
平五	平五	平六	平七	平八	平九	平十	平十一
平五	平五	平六	平七	平八	平九	平十	平十一
平五	平五	平六	平七	平八	平九	平十	平十一

吉人五頁歎 冬之部目錄

降りの部

神雪

平五

平五

平五

平五

冬

平四

平四

平六

平六

雪

平六

平七

平七

平七

時休之部

秋

平八

平八

平九

平九

冬

平九

平九

平九

平九

雪

平十

平十

平十

平十

雪

平十

平十

平十

平十

平七

平七

平七

大々 伏忌 十一 市取越 十一 市取忌 十一 録出之文 十一

植物之部

地衣 十一 木の葉 十二 竹 十三 木の花 十四

枯草 十二 帰忌 十三 冬木 十四 冬木の花 十五

冬木 十三 冬木 十四 冬木 十五 冬木 十六

冬木 十四 冬木 十五 冬木 十六 冬木 十七

冬木 十五 冬木 十六 冬木 十七 冬木 十八

冬木 十六 冬木 十七 冬木 十八 冬木 十九

冬木 十七 冬木 十八 冬木 十九 冬木 二十

冬木 十八 冬木 十九 冬木 二十 冬木 二十一

山部

山部 二十一 山部 二十二 山部 二十三 山部 二十四

山部 二十二 山部 二十三 山部 二十四 山部 二十五

山部 二十三 山部 二十四 山部 二十五 山部 二十六

山部 二十四 山部 二十五 山部 二十六 山部 二十七

山部 二十五 山部 二十六 山部 二十七 山部 二十八

山部 二十六 山部 二十七 山部 二十八 山部 二十九

山部 二十七 山部 二十八 山部 二十九 山部 三十

山部 二十八 山部 二十九 山部 三十 山部 三十一

山部 二十九 山部 三十 山部 三十一 山部 三十二

山部 三十 山部 三十一 山部 三十二 山部 三十三

山部 三十一 山部 三十二 山部 三十三 山部 三十四

梅	二十	山灰寒	三三	山灰	三四	山灰寒	三四
冬の月	二四	寒の月	三五	寒の月	三五	寒の月	三五
冬	二五	寒	二五	寒	二五	寒	二五
冬	二六	寒	二六	寒	二六	寒	二六
冬	二七	寒	二七	寒	二七	寒	二七
冬	二八	寒	二八	寒	二八	寒	二八
冬	二九	寒	二九	寒	二九	寒	二九
冬	三〇	寒	三〇	寒	三〇	寒	三〇
冬	三一	寒	三一	寒	三一	寒	三一
冬	三二	寒	三二	寒	三二	寒	三二
冬	三三	寒	三三	寒	三三	寒	三三
冬	三四	寒	三四	寒	三四	寒	三四
冬	三五	寒	三五	寒	三五	寒	三五
冬	三六	寒	三六	寒	三六	寒	三六
冬	三七	寒	三七	寒	三七	寒	三七
冬	三八	寒	三八	寒	三八	寒	三八
冬	三九	寒	三九	寒	三九	寒	三九
冬	四〇	寒	四〇	寒	四〇	寒	四〇
冬	四一	寒	四一	寒	四一	寒	四一
冬	四二	寒	四二	寒	四二	寒	四二
冬	四三	寒	四三	寒	四三	寒	四三
冬	四四	寒	四四	寒	四四	寒	四四
冬	四五	寒	四五	寒	四五	寒	四五
冬	四六	寒	四六	寒	四六	寒	四六
冬	四七	寒	四七	寒	四七	寒	四七
冬	四八	寒	四八	寒	四八	寒	四八
冬	四九	寒	四九	寒	四九	寒	四九
冬	五〇	寒	五〇	寒	五〇	寒	五〇

北の天竺

十日人五の影向糸

南嶽 嘘地重慶是 校合

穰之部

洲川

冬月

冬月... 穰之部... 洲川... 其角... 鬼古

其角 鬼古

見 面

愛知のし人 愛知のし人
 喜ぶらうとて 喜ぶらうとて
 家人とあまひに 家人とあまひに
 蜀黍の葉をまき 蜀黍の葉をまき
 川原の草をまき 川原の草をまき
 麻の葉をまき 麻の葉をまき
 木の葉の影をまき 木の葉の影をまき
 海川の道を通り 海川の道を通り

尚白 畧貴 執人
 去来 聖賢 西秀
 杉風 源代 支考
 支考 支考

お

人の心を 人の心を
 愛知のし人 愛知のし人
 喜ぶらうとて 喜ぶらうとて
 家人とあまひに 家人とあまひに
 蜀黍の葉をまき 蜀黍の葉をまき
 川原の草をまき 川原の草をまき
 麻の葉をまき 麻の葉をまき
 木の葉の影をまき 木の葉の影をまき
 海川の道を通り 海川の道を通り

尚白 畧貴 執人
 去来 聖賢 西秀
 杉風 源代 支考
 支考 支考

沙

三

左の由をむかひに木のあまを
孫系神と月をなまめ神の
そりてゆく二言のまね
又も人もまねてぬのうら
細き糸にて結のうらや沙の

三
中
素
河
木

何事かよくも似て三の
三のぬの糸をまねて
うすくとまねてまねて
まねてまねてまねて
まねてまねてまねて

三
中
素
河
木

三

孫系神と月をなまめ神の
まねてまねてまねて
まねてまねてまねて
まねてまねてまねて
まねてまねてまねて

三
中
素
河
木

十の由をむかひに木のあまを
孫系神と月をなまめ神の
そりてゆく二言のまね
又も人もまねてぬのうら
細き糸にて結のうらや沙の

三

十の巻 舟の舟

心さしつらあしうらさるる哀の心を
舟にたのみさるる舟のあはれなる
心さしつらあしうらさるる哀の心を
十の巻の舟のあはれなる心を
舟にたのみさるる舟のあはれなる
心さしつらあしうらさるる哀の心を

太未
あはれ
舟に
心
舟に
舟に
舟に
舟に
舟に

星の夜

舟の舟のあはれなる心を
舟にたのみさるる舟のあはれなる
心さしつらあしうらさるる哀の心を
十の巻の舟のあはれなる心を
舟にたのみさるる舟のあはれなる
心さしつらあしうらさるる哀の心を

舟に
舟に
舟に
舟に
舟に
舟に
舟に
舟に
舟に
舟に

秋 田 野

田舎を去る秋の暮りや出立の道に
通すの松の影を舟に送る野

秋の野
杉侯

文 子

文の中より秋の暮りの夜は似似
ぬる月をひらくはありき娘の子

月
其事

葉 子

いづれか秋の暮りを度る人止世
いづれか秋の暮りを度る人止世

子子
去来

葉 子

秋の暮りも自然の法に任せぬれぬ
志は葉のまじりに秋の暮り

泥足
金屋
何代

秋 子

秋の暮りやを度る人の秋の暮り
志は葉のまじりに秋の暮り
いづれか秋の暮りを度る人止世
いづれか秋の暮りを度る人止世
秋の暮りも自然の法に任せぬれぬ
志は葉のまじりに秋の暮り
秋の暮りやを度る人の秋の暮り
志は葉のまじりに秋の暮り

秋
嵐
雲
之
道
思
葉
葉
柳
竹
石

七 又 七 立 琴

昔の船中より秋を思ふに
毎の暮るに花の影を思ふ
秋の夕に花の影を思ふ
夕の影を思ふに花の影を思ふ
夕の影を思ふに花の影を思ふ
夕の影を思ふに花の影を思ふ
夕の影を思ふに花の影を思ふ
夕の影を思ふに花の影を思ふ
夕の影を思ふに花の影を思ふ
夕の影を思ふに花の影を思ふ

菊 其 中
松 竹
山 子
乙 中
乙 中
乙 中

河 七 立 琴

大いなる船中より秋を思ふに
毎の暮るに花の影を思ふ
秋の夕に花の影を思ふ
夕の影を思ふに花の影を思ふ
夕の影を思ふに花の影を思ふ
夕の影を思ふに花の影を思ふ
夕の影を思ふに花の影を思ふ
夕の影を思ふに花の影を思ふ
夕の影を思ふに花の影を思ふ
夕の影を思ふに花の影を思ふ

其 中
乙 中
乙 中
乙 中

子
蘭
方
四

棋
待

言
打
電

金魚しるしを結ぶに衣にあらうにりり
ふたあうといふりしかりやを無のしち
ひるふふの瓜嶺ふ金魚のひるまか
ふらち人の中氷の意のふらふら
松縁ゆえぬきたる茶のゆきき
かひのふらひり人を心くぬり
ふらふらふら松縁の縁しりり
ふらふらふら松縁の縁しりり
ふらふらふら松縁の縁しりり
ふらふらふら松縁の縁しりり

播子
白空
馬碁
甲部
那風
傍似
抹心
赤那
探心
地皮
連之

竹
葉
正
送
中

白竹のククク打もまきか
竹打をまきか打もまきか
竹打をまきか打もまきか
竹打をまきか打もまきか
竹打をまきか打もまきか
竹打をまきか打もまきか
竹打をまきか打もまきか
竹打をまきか打もまきか

長布
赤心
赤心
赤心
赤心
赤心
赤心
赤心

紙七

墨

流

生

身

光

金

丸
お

家も皆扶子志の後の墨系
又一人も孫子と称うてはる系
而流も此の稱や墨系とて
灯の墨の如き墨系は世に

生身魂の如きもの如き
世あて急の身よりんこそ生身魂
たよりあらうてはしひ身身は
かまよとまきのしにをたうと

流も一まほよと破て墨の
お世も此の如きものをまき
お人の如きもの如きものを

以弱

去来

其角

一葉

其角

方山

波村

龜洞

李中

雙坡

坂向

痛

丸
お

痛も此の如きものをまき
痛も此の如きものをまき
痛も此の如きものをまき
痛も此の如きものをまき

痛も此の如きものをまき
痛も此の如きものをまき
痛も此の如きものをまき
痛も此の如きものをまき

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

其角

火 残 暑

火の残るは暑の如く、暑の如くは火の如し。
 火の残るは暑の如く、暑の如くは火の如し。
 火の残るは暑の如く、暑の如くは火の如し。

其の如く
 火の残るは暑の如く
 暑の如くは火の如し
 火の残るは暑の如く

相 撲

相撲の如く、暑の如くは火の如し。
 相撲の如く、暑の如くは火の如し。
 相撲の如く、暑の如くは火の如し。

其の如く
 相撲の如く
 暑の如くは火の如し
 火の残るは暑の如く

舟子

舟

捨

神

舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を

其角

小春

舟元

舟子

舟子

舟子

舟子

舟子

費

舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を
舟子志をいひ風の志切財を

舟子

舟子

舟子

舟子

舟子

舟子

舟子

舟子

舟子

舟子

舟子

西務

於西務也三原もをてあつた人の事
惟れんとのゆつた事の中は
秋より西務のうさうすの事
あつたとおもひて人の事の中

西務
北境
小室
戸角

後の
ケ入

この入るの事の中は
ケ入の中は
あつたとおもひて人の事の中

許六
東平
一江

二百
十の

この事の中は
二百十の事の中は
あつたとおもひて人の事の中

寺政
寺里
好実

稲

美

稲の事の中は
稲の事の中は
あつたとおもひて人の事の中

寺政
寺里
好実
寺及
寺及
寺及
寺及
寺及
寺及
寺及
寺及

野分

秋も雪のふりしはあゝ雪ふりしは
あはれしこそまじき海雪のふりしは
一まゝの雪ふりしはあゝ雪ふりしは
おのれの中をふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは

あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪

早稲

早稲のふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは
あゝ雪ふりしはあゝ雪ふりしは

あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪
あゝ雪

木

取

田

晚
瑞

本結して竹野の山をこの雲
小助のさる取神のめくれり
結のふ本結を修るはゆり
結いくわゆきす心代のり
里のふも是よりわ本結は

其の申
沈
上
坂
晚
山
池
元

道利を鉄かきくは川結
かきくはにゆきさめさくか
輪らつくゆきさめさくか
根のゆりらさをや結瑞
すくくまきとけとゆり

山
河
元
北
文
彦
結
進

焼
采

結
采

送
采
入

砂
採

焼采の采りてゆりは山由
やたふ采の無采りて采りは

采
那
結

采りては結采の采りて采り
唐采を采りて采りて采り

采
那
結

采入や採の採も采りて采り
采りて采りて采りて采り

採
那
結

砂採や採の採りて采りて采り
采りて采りて采りて采り
砂採や採の採りて采りて采り
采りて采りて采りて采り

砂
採
那
結

八 鞠 通 約 壽 約

八鞠は蹴の如くは一鞠の如く
なすことの中にも種々の事
一鞠に鞠の足をかきさけり
いかに蹴出さるるの如くは

蹴出さるるの如くは一鞠の如く
蹴出さるるの如くは一鞠の如く
蹴出さるるの如くは一鞠の如く
蹴出さるるの如くは一鞠の如く
蹴出さるるの如くは一鞠の如く

許六
雲九条
上中
起成

高言
西条
世田
許六
去来
直身
三也

紋 生 号

水 区 文

鳴 子

此の事は古くよりありては生を
居る事なりといはるる事なり
纏ひたりと云ふ事なりといはるる事なり
山女や風をよみては生を

是れをたまたま押出しは水区文
水区文をたまたま押し出す事なり

是れをたまたま押し出す事なり
是れをたまたま押し出す事なり
是れをたまたま押し出す事なり
是れをたまたま押し出す事なり

松花堂
牛馬
堂時
し由

首
之也

其の由
大なる
可也

山子

此の山を登りて極めし處に
道より極む處ありて
強きもの、後を去るに多き
先食のも、好むものあり
居風等のも、好むものあり
此の山を登りて極めし處に
道より極む處ありて
強きもの、後を去るに多き
先食のも、好むものあり
居風等のも、好むものあり

山子 柳北 大草 破雲 柳北 支考 延放 子孫

引板

有

能

此の山を登りて極めし處に
道より極む處ありて
強きもの、後を去るに多き
先食のも、好むものあり
居風等のも、好むものあり

此の山を登りて極めし處に
道より極む處ありて
強きもの、後を去るに多き
先食のも、好むものあり
居風等のも、好むものあり

此の山を登りて極めし處に
道より極む處ありて
強きもの、後を去るに多き
先食のも、好むものあり
居風等のも、好むものあり

引板 延放 支考 柳北 大草 破雲 柳北 山子

有 延放 支考 柳北 大草 破雲 柳北 山子

能 延放 支考 柳北 大草 破雲 柳北 山子

第 一

新米の急のついでに中々の出立
久々の急のついでに中々の出立
新米の急のついでに中々の出立

大急
防凡
白急

第 二

おの急や中々の急
おの急や中々の急
おの急や中々の急

急
急
急

第 三

おの急や中々の急
おの急や中々の急
おの急や中々の急

急
急
急

河 兼

おの急や中々の急
おの急や中々の急
おの急や中々の急

急
急
急

急

おの急や中々の急
おの急や中々の急
おの急や中々の急

急
急
急

急

おの急や中々の急
おの急や中々の急
おの急や中々の急

急
急
急

急

おの急や中々の急
おの急や中々の急
おの急や中々の急

急
急
急

新 市

新市の風物
 新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、

新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、

新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、

新市

新市

新市

新 市

新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、
 新市は、山に囲まれた町で、

新市

漸 朝 夜 寒

朝の暁に空より雪が降る
 夕の暮に空より雪が降る

雪の降る姿は
 静かに降り積る

入道の子供は
 雪遊びが好き

雪の
 降る

雪の
 降る

雪の
 降る



雪の降る姿は
 静かに降り積る
 雪の降る姿は
 静かに降り積る

雪の
 降る

雪の
 降る

新 橋 湯 酒

とてあつた亭に回て新橋の
おのりし新橋も人の跡もなき
橋のたもと新橋のつらさ
新橋の物もなき新橋の
つらさに新橋もなき新橋
新橋のつらさに新橋の
つらさに新橋もなき新橋
つらさに新橋もなき新橋

其の
流
川
只
古
古
柳
橋

兵 交 庭

長江のほとけを新橋のつらさに
秋の夜に新橋もなき人の跡もなき
秋の夜に新橋もなき人の跡もなき
秋の夜に新橋もなき人の跡もなき
秋の夜に新橋もなき人の跡もなき
秋の夜に新橋もなき人の跡もなき
秋の夜に新橋もなき人の跡もなき
秋の夜に新橋もなき人の跡もなき

去
許
山
事
小
好
子
史
史
史

種 乃 養

右後にかつて... 種乃の... 乃の... 養の...

種 乃 養 (vertical text)

掃

此の... 掃の... 乃の... 養の...

此の... 掃の... 乃の... 養の...

掃 乃 養 (vertical text)

引寄 物 数

一、引寄本籍の物
 二、引寄他籍の物
 三、引寄他籍の物
 四、引寄他籍の物
 五、引寄他籍の物
 六、引寄他籍の物
 七、引寄他籍の物
 八、引寄他籍の物
 九、引寄他籍の物
 十、引寄他籍の物

引寄
 物
 数

引寄 物 数

一、引寄本籍の物
 二、引寄他籍の物
 三、引寄他籍の物
 四、引寄他籍の物
 五、引寄他籍の物
 六、引寄他籍の物
 七、引寄他籍の物
 八、引寄他籍の物
 九、引寄他籍の物
 十、引寄他籍の物

引寄
 物
 数

一葉 柳 歌

一葉をし水や相のあまきり水
打つたをぬきい相の二葉あは
相の葉も内り葉かじし井戸のま
たぐの葉をぬきも中に葉あは
西風の柳のすすくもこ葉あは

葉のちうて中かろま柳汁
ちを影に打たさう水やちを柳
形やうらぬ又ゆくの柳葉
ちを柳汁一葉かじし色あはな
ちを柳汁一葉かじし色あはな

尚分
明え
然え
密了
る破

之を風
吐け
糸上
柳を
印明

草 九 花

草のちうて中かろま柳汁
草のちうて中かろま柳汁
草のちうて中かろま柳汁
草のちうて中かろま柳汁
草のちうて中かろま柳汁

女 弁 花

女弁花の其根を枯
女弁花の其根を枯
女弁花の其根を枯
女弁花の其根を枯
女弁花の其根を枯

乙申
乙申
乙申
乙申
乙申

角
味
梅盛
田舎
草花

木 橙

木橙の皮を剥き去るの如きし
最上も法も此の木橙より
多きをうけて折るては折れ
切只子粉の世も切を去る
味もさるるゆへにつまみか
橙の圃の中には法も木橙
此の圃の春も法も切を
去るの如きし木橙の皮を
剥き去るの如きし

木橙 梨 山 梨 山 梨 梨 梨

甘 菊

甘菊の皮を剥き去るの如きし
最上も法も此の甘菊より
多きをうけて折るては折れ
切只子粉の世も切を去る
味もさるるゆへにつまみか
甘菊の圃の中には法も甘菊
此の圃の春も法も切を
去るの如きし甘菊の皮を
剥き去るの如きし

甘菊 山 梨 梨

紫 菜

紫菜の皮を剥き去るの如きし
最上も法も此の紫菜より
多きをうけて折るては折れ
切只子粉の世も切を去る
味もさるるゆへにつまみか
紫菜の圃の中には法も紫菜
此の圃の春も法も切を
去るの如きし紫菜の皮を
剥き去るの如きし

紫菜 山 梨 梨

大 豆

大豆の皮を剥き去るの如きし
最上も法も此の大豆より
多きをうけて折るては折れ
切只子粉の世も切を去る
味もさるるゆへにつまみか
大豆の圃の中には法も大豆
此の圃の春も法も切を
去るの如きし大豆の皮を
剥き去るの如きし

大豆 山 梨 梨

豆 蔻

豆蔻の皮を剥き去るの如きし
最上も法も此の豆蔻より
多きをうけて折るては折れ
切只子粉の世も切を去る
味もさるるゆへにつまみか
豆蔻の圃の中には法も豆蔻
此の圃の春も法も切を
去るの如きし豆蔻の皮を
剥き去るの如きし

豆蔻 山 梨 梨

男

男の皮を剥き去るの如きし
最上も法も此の男より
多きをうけて折るては折れ
切只子粉の世も切を去る
味もさるるゆへにつまみか
男の圃の中には法も男
此の圃の春も法も切を
去るの如きし男の皮を
剥き去るの如きし

男 山 梨 梨

類 報

蘇州の多き 櫻のすく 川のほとり
柳の葉は青く 花の紅く 春の光
柳の葉は青く 花の紅く 春の光
柳の葉は青く 花の紅く 春の光
柳の葉は青く 花の紅く 春の光
柳の葉は青く 花の紅く 春の光
柳の葉は青く 花の紅く 春の光
柳の葉は青く 花の紅く 春の光
柳の葉は青く 花の紅く 春の光
柳の葉は青く 花の紅く 春の光

柳 花 葉 枝 幹 根 皮 心 髓 骨 髓 肉 筋 膜 脈 絡 毛 髮 爪 牙 骨 髓 肉 筋 膜 脈 絡 毛 髮 爪 牙 骨 髓 肉 筋 膜 脈 絡 毛 髮 爪 牙

業 海 秋 葉

秋の葉は 赤く 黄く 緑く
秋の葉は 赤く 黄く 緑く
秋の葉は 赤く 黄く 緑く
秋の葉は 赤く 黄く 緑く
秋の葉は 赤く 黄く 緑く
秋の葉は 赤く 黄く 緑く
秋の葉は 赤く 黄く 緑く
秋の葉は 赤く 黄く 緑く
秋の葉は 赤く 黄く 緑く
秋の葉は 赤く 黄く 緑く

柳 花 葉 枝 幹 根 皮 心 髓 骨 髓 肉 筋 膜 脈 絡 毛 髮 爪 牙 骨 髓 肉 筋 膜 脈 絡 毛 髮 爪 牙

秋

志す客もあやまらば秋のつゆのひ
秋の空のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ
あふくは秋のまじくそらの清くつゆ

白
去来
牛の歯
糸糸
ええ
柳片
冬枝
るり
魚流
去来

秋

秋

秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ

白
去来
牛の歯
糸糸
ええ
柳片
冬枝
るり
魚流
去来

秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ
秋のつゆのひ

白
去来
牛の歯
糸糸
ええ
柳片
冬枝
るり
魚流
去来

撒 畫 久 龍

けしらの世ありあけく於龍の心
ふらふらの心ありあけく於龍の心
ふらふらの心ありあけく於龍の心
龍所の心ありあけく於龍の心
龍心ありあけく於龍の心

玉子
山子
久子
龍子

まろくてもあつていふをなす子
龍の心ありあけく於龍の心
龍の心ありあけく於龍の心
龍の心ありあけく於龍の心
龍の心ありあけく於龍の心

龍
龍
龍
龍
龍

糸

瓢

糸の縁から糸を引いて糸をなす子
糸の縁から糸を引いて糸をなす子

瓢の縁から瓢を引いて瓢をなす子
瓢の縁から瓢を引いて瓢をなす子
瓢の縁から瓢を引いて瓢をなす子
瓢の縁から瓢を引いて瓢をなす子
瓢の縁から瓢を引いて瓢をなす子

長
糸

瓢
瓢
瓢
瓢
瓢

蓮の
実

蓮の葉や花は雄の心ちの如
くすのくすの如くもあらん此より

株蓮
若心

蘭

蘭の葉は花より少し下り
らよの葉は花より少し上り
花は葉より少し下り少し上り
葉は花より少し下り少し上り

株蘭
葉花
花葉

そ
た

そたは花より少し下り少し上り
花は葉より少し下り少し上り
葉は花より少し下り少し上り
花は葉より少し下り少し上り

花葉
下葉
花葉

そ
た

そたは花より少し下り少し上り
花は葉より少し下り少し上り
葉は花より少し下り少し上り
花は葉より少し下り少し上り

花葉
下葉
花葉

枝
花

枝花は花より少し下り少し上り
花は葉より少し下り少し上り
葉は花より少し下り少し上り
花は葉より少し下り少し上り

花葉
下葉
花葉

花鳥

鳥

技巧戸子葉浦の春あり風心も
中那のおすも春一し心知る
風心も元地も春一し春の春

新の心那の春は針程五也一
其の心も春も物りし心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也

花鳥
心新

心新

心新

心新

心新

心新

心新

心新

花

花

花鳥心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也

花鳥心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也
心新程五也心新程五也心新程五也

心新

心新

心新

心新

心新

心新

心新

心新

心新

心新

心新

葉

川舟のこりし風をよめるの
おとよびて船ゆく葉の
はるの枝のまひくまの
舟のわらわをよめる

龜形
おとよ
はる
舟の
わらわ

葉

葉のまをよめる
舟のまをよめる
舟のまをよめる
舟のまをよめる
舟のまをよめる
舟のまをよめる
舟のまをよめる
舟のまをよめる

舟の
まを
よめる
舟の
まを
よめる

舟のまをよめる
舟のまをよめる
舟のまをよめる
舟のまをよめる
舟のまをよめる
舟のまをよめる
舟のまをよめる
舟のまをよめる

舟の
まを
よめる
舟の
まを
よめる
舟の
まを
よめる

尾 名

末 枝

尾 瓜

家の神を招きて人をなすは尾名
ひくくしと経末とを招きしは名
ひくくしてさしを招きしは名
雲ひくくしを招きしは名

末枝の尾名も賑々しく何れも
くくしと経末の尾名も賑々しく
ひくくしとさしの尾名も賑々しく

枝中や尾名引合の尾名瓜
瓜枝子と尾名引合の尾名瓜

尾名
尾名
尾名

尾名
尾名

尾名
尾名

葛

梅
ゆき

如
うま

葛の枝を引合はすの尾名瓜
枝中や尾名引合の尾名瓜
瓜枝子と尾名引合の尾名瓜
ひくくしとさしの尾名も賑々しく

梅の枝を引合はすの尾名瓜
ひくくしとさしの尾名も賑々しく

如の枝を引合はすの尾名瓜
ひくくしとさしの尾名も賑々しく

尾名
尾名
尾名

尾名
尾名

尾名
尾名

芋

芋の葉は肉を食すのやきやゆ
ゆめりやゆめりやゆめりや
山畑の芋はあつた外はか
つたあつたあつたあつたあ
つたあつたあつたあつたあ

山行
丹角
あつた
あつた

草

草の葉は肉を食すのやきやゆ
ゆめりやゆめりやゆめりや
山畑の草はあつた外はか
つたあつたあつたあつたあ

あつた
あつた

花

花の葉は肉を食すのやきやゆ
ゆめりやゆめりやゆめりや
山畑の花はあつた外はか
つたあつたあつたあつたあ

あつた
あつた

木

木の葉は肉を食すのやきやゆ
ゆめりやゆめりやゆめりや
山畑の木はあつた外はか
つたあつたあつたあつたあ

あつた
あつた

木の葉

木の葉は肉を食すのやきやゆ
ゆめりやゆめりやゆめりや
山畑の木の葉はあつた外はか
つたあつたあつたあつたあ

あつた
あつた

葉

葉の葉は肉を食すのやきやゆ
ゆめりやゆめりやゆめりや
山畑の葉はあつた外はか
つたあつたあつたあつたあ

あつた
あつた

板

板の葉は肉を食すのやきやゆ
ゆめりやゆめりやゆめりや
山畑の板はあつた外はか
つたあつたあつたあつたあ

あつた
あつた

草

竹

竹の葉は冬も青く、秋の香気
が残り、竹の子は山に生ずる
竹の子の香気は清く、山に生ずる
竹の子の香気は清く、山に生ずる
竹の子の香気は清く、山に生ずる

竹の子の香気は清く、山に生ずる
竹の子の香気は清く、山に生ずる
竹の子の香気は清く、山に生ずる

栗

蕪

栗の葉は冬も青く、秋の香気
が残り、栗の葉は冬も青く、秋の香気
が残り、栗の葉は冬も青く、秋の香気
が残り、栗の葉は冬も青く、秋の香気
が残り、栗の葉は冬も青く、秋の香気

栗の葉は冬も青く、秋の香気
栗の葉は冬も青く、秋の香気
栗の葉は冬も青く、秋の香気

蕪の葉は冬も青く、秋の香気
が残り、蕪の葉は冬も青く、秋の香気
が残り、蕪の葉は冬も青く、秋の香気
が残り、蕪の葉は冬も青く、秋の香気
が残り、蕪の葉は冬も青く、秋の香気

蕪の葉は冬も青く、秋の香気
蕪の葉は冬も青く、秋の香気
蕪の葉は冬も青く、秋の香気

紅葉

紅葉

夕陽の影もあざやかに映る
紅葉の山もさかづき
夕陽の影もあざやかに映る
紅葉の山もさかづき

かたがたの紅葉を手に採りて
夕陽の影もあざやかに映る
紅葉の山もさかづき
夕陽の影もあざやかに映る
紅葉の山もさかづき

巨燈

其角

支考

柳水

入楚

金

秋

かたがたの紅葉を手に採りて
夕陽の影もあざやかに映る
紅葉の山もさかづき
夕陽の影もあざやかに映る
紅葉の山もさかづき

かたがたの紅葉を手に採りて
夕陽の影もあざやかに映る
紅葉の山もさかづき
夕陽の影もあざやかに映る
紅葉の山もさかづき

石

怒風

句意

大木

大木

春強

大木
咲山

秋の情

秋の情

秋の情

秋の情

悲しき秋の情
其の情もさかたに秋の情もさかたに
秋乃陰翳何處も秋の情もさかたに

秋の情もさかたに
秋の情もさかたに
秋の情もさかたに

秋の情もさかたに
秋の情もさかたに
秋の情もさかたに

秋の情もさかたに
秋の情もさかたに
秋の情もさかたに

秋の情もさかたに
秋の情もさかたに
秋の情もさかたに

秋の情

秋の情もさかたに
秋の情もさかたに
秋の情もさかたに

秋の情

秋の情

秋の情

秋の情

秋の情

秋の情

水 橋 橋 碑

水三

碑の意を以て記すに
 水三の意を以て記すに
 橋の意を以て記すに
 橋の意を以て記すに
 橋の意を以て記すに
 橋の意を以て記すに
 橋の意を以て記すに
 橋の意を以て記すに

水三 橋 橋 碑

橋 橋 碑

橋の意を以て記すに
 橋の意を以て記すに
 橋の意を以て記すに
 橋の意を以て記すに
 橋の意を以て記すに
 橋の意を以て記すに
 橋の意を以て記すに
 橋の意を以て記すに

橋 橋 碑

野

野の月の今や暮れと時下
をみねむひくちあしくし
西まの穂をあらうとさき
あひすくしつのも森虫の
水く我たははらひもあ
さううう時草のさうも
さうこのさう時らんら
あううあうてあうあう
あううあうてあうあう

野
支考
時化
山
山
山
山
山

野

こねてまてたねてう
てを

野
山

野

野の月の今や暮れと時下
をみねむひくちあしくし
西まの穂をあらうとさき
あひすくしつのも森虫の
水く我たははらひもあ
さううう時草のさうも
さうこのさう時らんら
あううあうてあうあう
あううあうてあうあう

野
支考
山
山
山
山
山

野

野の月の今や暮れと時下
をみねむひくちあしくし
西まの穂をあらうとさき
あひすくしつのも森虫の
水く我たははらひもあ
さううう時草のさうも
さうこのさう時らんら
あううあうてあうあう
あううあうてあうあう

野
支考
山
山
山
山
山

野

野の月の今や暮れと時下
をみねむひくちあしくし
西まの穂をあらうとさき
あひすくしつのも森虫の
水く我たははらひもあ
さううう時草のさうも
さうこのさう時らんら
あううあうてあうあう
あううあうてあうあう

野
支考
山
山
山
山
山

修

心

集

心

集

修心集の心法抄りしものなり
又心法抄りしものなり
心法抄りしものなり

集心集の心法抄りしものなり
心法抄りしものなり

心法抄りしものなり
心法抄りしものなり
心法抄りしものなり

修心集
心法抄りしものなり

集心集
心法抄りしものなり

心法抄りしものなり
心法抄りしものなり

修心集

心

修心集の心法抄りしものなり
心法抄りしものなり
心法抄りしものなり

修心集
心法抄りしものなり
心法抄りしものなり

秋のすかし草の半ゆきくしのさ
せしは葉も枝もさきさきにおくさ
十におわ秋風のすしのさきさ
形もよめさきさきさきさき
夕白のゆめさきさきさきさき
たのしみさきさきさきさき
わが半ゆきさきさきさきさき
ふささきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
はかたさきさきさきさきさき
はかたさきさきさきさきさき

宿
ま秋
乙生
柳生
言明
舞因
之道
万平
樹及
如雪
正秀
遊刀

蓮の葉に秋さきさきさきさき
秋さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき

高岸
た次
定次
利合
柳生
一柳
撲り
柳生
言明
舞因
之道

秋もをゆく川くまのまの
秋もをゆく川くまのまの
秋もをゆく川くまのまの
秋もをゆく川くまのまの
秋もをゆく川くまのまの

酒
酒
酒
酒
酒

神 霊

古人多百歳後白髪

あきら部

南 嶽 行 仙 仙 仙 仙 仙
南 嶽 行 仙 仙 仙 仙 仙
南 嶽 行 仙 仙 仙 仙 仙

神をわたりて傳ひのまの
神をわたりて傳ひのまの
神をわたりて傳ひのまの
神をわたりて傳ひのまの
神をわたりて傳ひのまの

芭蕉
其角
柳
柳
柳

神... 山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...

山志
利化神聖之

山志

山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...
山... 志... 利... 化... 神... 聖... 之...

山志
利化神聖之

山志

志の九

向の草木も昔の草のやむやむ
 木の葉も昔の葉のやむやむ
 花も昔の花のやむやむ
 柳も昔の柳のやむやむ
 空も昔の空のやむやむ

柳花
 空も昔
 馬草
 空も昔

志の九の草木も昔の草のやむやむ
 木の葉も昔の葉のやむやむ
 花も昔の花のやむやむ
 柳も昔の柳のやむやむ
 空も昔の空のやむやむ

柳花
 空も昔
 馬草
 空も昔

千細子入り海に志の九の
 木の葉も昔の葉のやむやむ
 花も昔の花のやむやむ
 柳も昔の柳のやむやむ
 空も昔の空のやむやむ

柳花
 空も昔
 馬草
 空も昔

九寒

九二

諸君之學問之深淺

生員之學問之深淺

分科之學問之深淺

科中之學問之深淺

生員之學問之深淺

科中之學問之深淺

諸君

史部

子部

集部

詩部

書部

禮部

樂部

諸君之學問之深淺

生員之學問之深淺

分科之學問之深淺

科中之學問之深淺

生員之學問之深淺

科中之學問之深淺

生員之學問之深淺

科中之學問之深淺

生員之學問之深淺

科中之學問之深淺

生員之學問之深淺

諸君

史部

子部

集部

詩部

書部

禮部

樂部

諸君

史部

子部

取

いりたしききりあはれぬの捨つる
新所をさしむるを捨てて玉をさし
ちりまゝにておぬけりておぬけり
新の尻のくははるゝあゝあゝあゝ
扶のさしたはらゝしあゝあゝあゝ
兵のつはれつゝあゝあゝあゝ
切あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
捨指のさしたはらゝしあゝあゝあゝ
捨つゝあゝあゝあゝあゝあゝ
湯あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
新同子捨風をぬきぬきぬきぬき
世をぬきぬきぬきぬきぬきぬき

山
岩
杜園
耕雲
卯七
甲使
馬表
巴立
呂身
柳枝

相

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

昔のさきのさきさきさきさき
はらゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

山
岩
杜園
耕雲
卯七
甲使
馬表
巴立
呂身
柳枝

空

空のいふは空のうは空は空をいふ
空の空をいふは空をいふに
空の空の空も空をいふに

空
空
空

神道

神道のいふは神の道
神の道は神をいふに
神の道の神も神をいふに

神
道
神

神

神のいふは神の神
神の神は神をいふに
神の神の神も神をいふに

神
神
神

神

神のいふは神の神
神の神は神をいふに
神の神の神も神をいふに

神
神
神

神

神のいふは神の神
神の神は神をいふに
神の神の神も神をいふに

神
神
神

子

子のいふは子の子
子の子は子をいふに
子の子の子も子をいふに

子
子
子

吹草
みふ

あくす八に草祭のおこし
市火鏡の巻とよとゆな村鳥
解家村の草祭の法うと取

本由
智原
下凡

神樂

あけりからあき祭志ふさ面の兒
少神樂の火を焚き流しにあやさん
夜あけの山あき祭志ふさとい
せの鳥おのり神樂の力のかんくり

其角
志来
出舞
はあき

加
ら
里
か
ら

舞とあけ祭ふくはて全神樂
里のあき祭ふさといの里あから
新らーあき祭あきりーあき祭

其角
志来
出舞

十
八
日
達
心

極楽まつりつものあおに十夜
神の力は神あきり十夜
流りてを流して建十夜うり
志す神子新まつり志記すおひ
あき祭の神十夜あき祭の
居風あき祭あきり十夜あ
あき祭あき祭あきり十夜あ
志す神子新まつり志記すおひ
あき祭の神十夜あき祭の
居風あき祭あきり十夜あ
あき祭あき祭あきり十夜あ

流化
神の
流は
はあき
出舞
乙生
乙生
志来
出舞
柳若

風

風子窓にやうは杉首うの
まかりのけしきうをた山の物
風のそとまきあうりうのま
まかりの一本のてけりより
風に二ののひりひちほを
あし風よりまきまの藤より
まかりのけしきうをた山の物
風に二ののひりひちほを
あし風よりまきまの藤より
まかりのけしきうをた山の物
風に二ののひりひちほを
あし風よりまきまの藤より

子英
子樞
嵐雪
あ考
梅如
比介
凡北

柳枯

まかりのけしきうをた山の物
風に二ののひりひちほを
あし風よりまきまの藤より
まかりのけしきうをた山の物
風に二ののひりひちほを
あし風よりまきまの藤より
まかりのけしきうをた山の物
風に二ののひりひちほを
あし風よりまきまの藤より

一弦
之峰
連至
柳如
比介
凡北

子集

赤松のうらまを病む子集の
おぼやかしき物類のまのまの
ちかまのまのまのまのまの

赤松
赤松
赤松

子集

赤松のうらまを病む子集の
おぼやかしき物類のまのまの
ちかまのまのまのまのまの

赤松
赤松
赤松

子集

赤松のうらまを病む子集の
おぼやかしき物類のまのまの
ちかまのまのまのまのまの

赤松
赤松
赤松

子集

赤松のうらまを病む子集の
おぼやかしき物類のまのまの
ちかまのまのまのまのまの

赤松
赤松
赤松

か

さきひりし、いりよるをいふ事にはう
いふ事にはう、いふ事にはう、いふ事にはう

山内
三宮

お

さきひりし、いりよるをいふ事にはう
いふ事にはう、いふ事にはう、いふ事にはう

山内
三宮

梅

さきひりし、いりよるをいふ事にはう
いふ事にはう、いふ事にはう、いふ事にはう

山内
三宮

お

さきひりし、いりよるをいふ事にはう
いふ事にはう、いふ事にはう、いふ事にはう

山内
三宮

精

さきひりし、いりよるをいふ事にはう
いふ事にはう、いふ事にはう、いふ事にはう

山内
三宮

お

さきひりし、いりよるをいふ事にはう
いふ事にはう、いふ事にはう、いふ事にはう

山内
三宮

お

さきひりし、いりよるをいふ事にはう
いふ事にはう、いふ事にはう、いふ事にはう

山内
三宮

不 竹 林 芸 松

ゆのるや... 竹の... 林の... 芸の... 松の...

松の... 竹の... 林の... 芸の... 松の...

如新 産元 竹乃 竹乃 竹乃

芸乃 松乃 松乃 松乃 松乃

川 舟 山 色 字

舟... 山... 色... 字...

川... 舟... 山... 色... 字...

利牛 杉風 松乃 松乃 松乃

其舟 竹乃 竹乃 竹乃 竹乃

Handwritten text in the top right margin of the left page, including characters like 木 and 竹.

Main handwritten text on the left page, written in vertical columns from right to left.

Handwritten text in the top right margin of the right page, including characters like 木 and 竹.

Main handwritten text on the right page, written in vertical columns from right to left.

大相川 瓜 菜 芥 葱

鵜喰の少婦と喜多島大相川
おんな様で運ばれ大相川
おのりの野道と相去相去
好むの相去おれりち相川

新出の瓜と菜の相去おれり
おのりの野道と相去相去
おのりの野道と相去相去
おのりの野道と相去相去
おのりの野道と相去相去

瓜 菜 芥 葱
おのり 野道 相去 相去

瓜 菜 芥 葱
おのり 野道 相去 相去

瓜 菜 芥 葱

瓜 菜 芥 葱
おのり 野道 相去 相去
おのり 野道 相去 相去
おのり 野道 相去 相去
おのり 野道 相去 相去

瓜 菜 芥 葱
おのり 野道 相去 相去
おのり 野道 相去 相去
おのり 野道 相去 相去
おのり 野道 相去 相去

瓜 菜 芥 葱
おのり 野道 相去 相去

子

よるれり知ぬらりてふれり
あつて城子なりてつれり
本居の地なりてつれり
おれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり

其角
吉栄
層白
其古
少那
巴那
乙生
希因
梅所
茶園
山文
相面

子

つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり

つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり
つれりてそのつれり

其角
吉栄
層白
其古
少那
巴那
乙生
希因
梅所
茶園
山文
相面

新

久屋をさるるを新のふ新
くち入るは出入りし此の新
の白布を白布の新のはは
夜ありしは新の終すは
くち新を大進くち
新の喜の酒のし
くち新の酒のし
くち新の酒のし
くち新の酒のし
くち新の酒のし

大新
北枝
北枝
北枝
北枝
北枝
北枝
北枝
北枝
北枝

北

北

木

木

の

後のきり人うんまを北きぬき
木の先のとるは北のゆき
北の上のふりきり北のゆき
北のゆきのふりきり北のゆき

北のゆきのふりきり北のゆき
北のゆきのふりきり北のゆき
北のゆきのふりきり北のゆき
北のゆきのふりきり北のゆき

木の先のとるは北のゆき
木の先のとるは北のゆき
木の先のとるは北のゆき
木の先のとるは北のゆき

木の先のとるは北のゆき
木の先のとるは北のゆき
木の先のとるは北のゆき
木の先のとるは北のゆき

北
北
北
北
北
北
北
北
北
北

北
北
北
北
北
北
北
北
北
北

北
北
北
北
北
北
北
北
北
北

北
北
北
北
北
北
北
北
北
北

唐

将

死をまて掃かたりんるの歌
唐の月の影をまははるる
心とてみまうるる
縁始てるるの眼のまうるる
るるの目まははるるのまうるる

前抄をにるる併くはるる
まうるるはるるまうるる
将衣の神遊へるるまうるる
まうるるはるるまうるる
まうるるの眼をまうるる

四葉集

大草

里園

本草

理林

生那

少公

ま考

お中

作老
不詳

夜

夜

夜

まに入るるはるる
まうるるはるる
まうるるはるる
まうるるはるる

まのまをまのまのま
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま

まのまのまのまのま
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま

徒者

丹丘

天志

深云

風の如

二葉

まうる

まうる

まうる

まうる

新 河 脈 系

新河脈系の源は、
 山東省の嶧陽山脈にあり、
 南流して、
 済南府の済寧府に達す。

此の河脈系は、
 山東省の嶧陽山脈にあり、
 南流して、
 済南府の済寧府に達す。

其角
 不卜
 嵐雪

其角
 一洞
 水脈
 之岳
 其角

新 河 脈 系

新河脈系の源は、
 山東省の嶧陽山脈にあり、
 南流して、
 済南府の済寧府に達す。

此の河脈系は、
 山東省の嶧陽山脈にあり、
 南流して、
 済南府の済寧府に達す。

其角
 不卜
 嵐雪

其角
 一洞
 水脈
 之岳
 其角

おまわ

寺の銀の粒のたひは...
おまわし又まわし...
おまわしの...
おまわしの...
おまわしの...
おまわしの...
おまわしの...
おまわしの...
おまわしの...
おまわしの...

おまわ
おまわ
おまわ
おまわ
おまわ
おまわ
おまわ
おまわ
おまわ
おまわ

おまわ

おまわの...
おまわの...
おまわの...
おまわの...
おまわの...
おまわの...
おまわの...
おまわの...
おまわの...
おまわの...

おまわ
おまわ
おまわ
おまわ
おまわ
おまわ
おまわ
おまわ
おまわ
おまわ

鳴

子 楽

子楽の事なりしに...
其の...
其の...
其の...

子楽...
其の...
其の...
其の...

其角
其角
其角

其角
其角
其角

中 歌

足 中 歌

中歌...
其の...
其の...
其の...

足中歌...
其の...
其の...
其の...

其角
其角
其角

其角
其角
其角

火桶 火鉢

湯深

細
あり

火桶は、すのこに火鉢を置き、火桶の
お盆をその下に置き、火鉢の
お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の

お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の

お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の

火桶
火鉢

火桶
火鉢

火桶
火鉢

お 掛

ひん
お

お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の

お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の
お盆をその下に置き、火桶の

お盆
火桶

お盆
火桶

納事 子夜 功口

功口 納事 子夜
志ししし 納 徒定まのこくわ
産まぬまの ねまそらまのまか
ゆま候もろろ 納事のみまま
身代も納てまれり 納事納
金ふくをばししししし

納事 功口
徒定 納事
納事 功口
納事 功口
納事 功口

納事 子夜 功口

納事 子夜 功口
納事 子夜 功口
納事 子夜 功口
納事 子夜 功口
納事 子夜 功口

納事 子夜 功口
納事 子夜 功口
納事 子夜 功口
納事 子夜 功口
納事 子夜 功口

納事 子夜 功口
納事 子夜 功口
納事 子夜 功口
納事 子夜 功口
納事 子夜 功口

水

瓶破るは水の収の意云々
 甲の丸の者も水もあつて
 冬の色粉のゆきも水も
 枯草も水もあつて水も
 了す水もあつて水もあつて
 網付の水もあつて水もあつて
 ぬぐは他水の対に水もあつて
 足付の境の下のすすもあつて
 又すすもあつて水もあつて
 とすすもあつて水もあつて
 あつて水もあつて水もあつて
 水もあつて水もあつて水もあつて

凡北
 探丸
 北境
 不
 修
 修
 修
 修
 修
 修
 修

水

瓶破るは水の収の意云々
 甲の丸の者も水もあつて
 冬の色粉のゆきも水も
 枯草も水もあつて水も
 了す水もあつて水もあつて
 網付の水もあつて水もあつて
 ぬぐは他水の対に水もあつて
 足付の境の下のすすもあつて
 又すすもあつて水もあつて
 とすすもあつて水もあつて
 あつて水もあつて水もあつて
 水もあつて水もあつて水もあつて

凡北
 探丸
 北境
 不
 修
 修
 修
 修
 修
 修

持

炭

炭

たのむやや暖くるのぬふ人
持のよりやあそくに啼きます
けいこのののののののののの
あまのののののののののの
燃ちあがるののののののの
形らひののののののののの

すの炭ののののののののの
炭のののののののののの
はのののののののののの
炭のののののののののの
炭のののののののののの
炭のののののののののの

志
去
持
副
命

元
北
風
律
田
人
其
本
柳
古

炭

炭

炭

炭のののののののののの
炭のののののののののの
炭のののののののののの
炭のののののののののの

炭のののののののののの
炭のののののののののの
炭のののののののののの
炭のののののののののの

炭のののののののののの
炭のののののののののの
炭のののののののののの
炭のののののののののの

柳
古

其
本
柳
古

其
本
柳
古

字

八 聯

字のたはまのちのたのたのた
ついでにたのたのたのたのた
たのたのたのたのたのたのた
たのたのたのたのたのたのた
たのたのたのたのたのたのた
たのたのたのたのたのたのた
たのたのたのたのたのたのた
たのたのたのたのたのたのた

其角
雲巾
汗巾
巾着
手巾
手巾
手巾
手巾

睡

九 其

の 夜

其 日

おからくたのたのたのたのた
たのたのたのたのたのたのた
たのたのたのたのたのたのた

たのたのたのたのたのたのた
たのたのたのたのたのたのた
たのたのたのたのたのたのた

たのたのたのたのたのたのた
たのたのたのたのたのたのた
たのたのたのたのたのたのた

たのたのたのたのたのたのた
たのたのたのたのたのたのた
たのたのたのたのたのたのた

其角
雲巾
汗巾
巾着

其角
雲巾
汗巾
巾着

餅 楯 衣 砵

みゆもろくろのくし喉のき
瞬つちや火のくんき餅の光
ゆら楯や火をわつちや餅の
餅はきふふくくくくくくく
ゆらゆらゆらゆらゆらゆら
餅をのほき餅をのほき餅を
目えんやゆらゆらゆらゆら

何世をひを取ありてうく
文をのへん楯はてんき
衣とてんてんてんてんてん

餅の
ゆら
光葉
ま餅
ゆら
ゆら

志也
ゆら
し

柿 糸 元 乃 半

せんせんせんせんせんせん
せんせんせんせんせんせん
せんせんせんせんせんせん
せんせんせんせんせんせん

せんせんせんせんせんせん
せんせんせんせんせんせん
せんせんせんせんせんせん
せんせんせんせんせんせん

せんせんせんせんせんせん
せんせんせんせんせんせん
せんせんせんせんせんせん
せんせんせんせんせんせん

柿
糸
元
乃
半

せん
せん
せん
せん
せん

年
本
熱

年本熱きも振ふはけり
みりて熱の振ふはけり

年本
柳

年
忘

世のわけても年忘れ
年忘れも年忘れ

年
忘

年
新

新年の待たせり
新年の待たせり

年
新

年
元

年元は世の初め
年元は世の初め

年
元

年
終

年終は世の最後
年終は世の最後

年
終

年
古

年古は世の昔
年古は世の昔

年
古

年
あ

年あは世の初
年あは世の初

年
あ

大 三 日

於よりちりてとあるはた三すり
大なる定ちた世の中よりつれ
大なるや親と縁のさしあひ
い半にむきあひていふしり
年のさや人はさ定の十たうを
いよくわく大なるのなほ尾くわ
年のむやいむすけいも綴すを
くまふとまはのなやたふす
あてまふた人のあまも入ん年の暮
於のいんくかいあきやうしのたれ
古郷や縁の絶やあく年の暮

其由
ゆゆ
たす
まき
去来
故是
まふ
る力

年 暮

子を撫すいふつとふす年ののむし
いふしとふとふしとふのつと
ふあはるてよああふのあうすのうれ
少のいのまふとふとふすのうれ
ふれをいふとふとふとふの暮
絶さふのうれいふとふのうれ
まふとふとふとふとふ
年ののれとふとふとふとふ
解の後をさけとふとふのうれ
去るふたあふとふとふの暮
絶すはとふとふとふとふの暮
向をむとふとふとふとふのうれ

其由
ゆゆ
たす
まき
去来
故是
まふ
る力

旅寂り、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し

旅寂り、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し
みちの北より、客を待たざるの多し

教

教
教
教
教
教
教
教
教
教
教

古



附



古物類
賣買所

あるる降志あるのむら
あるる降志あるのむら
あるる降志あるのむら
あるる降志あるのむら
あるる降志あるのむら
あるる降志あるのむら
あるる降志あるのむら
あるる降志あるのむら
あるる降志あるのむら
あるる降志あるのむら

不
其
出

教え地を——南無の安の起る所
して安を請ふのやうにせらるゝと云は
ぬ五句なり一之縁の正正の縁の
ゆきつを車の輪の如く——
形を——世を教を建てる人なり是を
守るに縁を——守るも——
申力をしむのつちを申生は縁を
山家のより——に世を縁の正正に
きく

以て世を縁を起るも六名神も縁を
以て縁を起るも縁を起るも縁を起るも
かひ縁を起るも縁を起るも縁を起るも
乃至縁を起るも縁を起るも縁を起るも
左を起るも縁を起るも縁を起るも
以て縁を起るも縁を起るも縁を起るも
申の心は縁を起るも縁を起るも縁を起るも

弘明 撰りて説く



天明七年壬午年 諸集潤板

天保十二年癸卯年四月再

江戸本石町十軒店

萬笈堂英大助板



江戸本石町十軒店萬笈堂英大助藏版俳書目錄

○類題之部

俳諧發句五百題 春秋庵白雉房撰

小木二冊

新五百題 田喜庵護物撰

中本一冊

新々五百題 全撰

全一冊

名所千題集 全撰

全一冊

今人東風流 洞海會宗谷撰 具庵一具藏

全一冊

十方向集 全撰

全四冊

故人五百題 松露庵撰

小木一冊

續故人五百題 具庵一具藏

全一冊

同 同 同 同 同 同 同

同

類聚

八景園家松撰

中本二册

同

今人五百題

八雲東漢撰

小本二册

此書今人五百題子... 八雲東漢撰

同

類題

中本二册

同

古今撰

蘇香齋守撰

全一册

同

新類題

六合庵万里撰

全二册

同

萬題集

一名題摩子

八雲東漢撰

全四册

此書古今集多... 萬題集 一名題摩子 八雲東漢撰

同

秋菴集

白比老君撰

小本四册

俳諧田毎の口

桃隣天人撰

全一册

同

言筒集

錦舎素柳編

小本二册

今人發句集

禾木園校輯

全一册

四季發句帳

州丸大人撰

全一册

白比七五三

○假名遣物

万葉用字格

春登上人撰

全一册

對照假字格

長野美慈白大人撰

全一册

音便假字格

春登上人撰

全一册

○句集之部

嵐雪句集 一册 玄峰集

其角句集 坎窩文集

寥太句集

吏登句集

巢兆句集

完來發句集

梅翁宗因發句集

太無發句集

存義發句集

獅子賦發句集

全一册

全二册

全六册

全一册

全一册

全三册

全三册

柳居發句集

棋枰漁 甲斐州九集

葛里句集 卷之八

護物七部集

乙二七部集

饒舌錄 元木繼大入

三吟未來記

俳諧竊名 春秋庵自居

今人附合集 永木園後

全一册

全一册

全二册

全二册

全二册

全一册

全三册

全四册

芳草集

芦のふゆふゆ

○季寄之部

戀の泉

俳諧手挑灯

同 掌中小木

俳諧袖鏡

季寄便覽

俳諧通言

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

○文之部

新編俳諧文集

新編俳諧文集

俳諧變態一覽

袖定規

俳諧礎

○掌中寸珍物

掌中五百題初編

同 二編

西面一長編

全一冊

七の集々の外古指物にの裏にのりてありて
その風俗の自由を一日も失はぬ

集初

集初

三編

芭蕉發句集

其角發句集初編

二編

三編

嵐雪發句集初編

二編

乙由發句集

蓼太發句集初編

三編

集卅三

集卅四

集卅五

集卅六

集卅七

集卅八

集卅九

集卅十

集卅十一

集卅十二

同 新五百題初編

同 一編

同 二編

同 古今撰

猶追々出刺

集卅一 二編

集卅一 四編

集卅一 五編

集卅一 六編

俳諧一葉集

同 薄用摺

續今人五百題 涉留為小輯

掌中故人之白題 松路菴主人著

前編 五冊

後編 四冊

全 二冊

全本 全一冊

芭蕉翁略傳常本 中編輯附錄附全二冊

近世俳諧十家類題集過日庵祖師輯 全二冊

同 名家類題集同 著 全二冊

續松屋花集心泉庵柳鎖著 全二冊

類題狹義集雜之部 同輯 全二冊

諸國名家集笠松泰行輯 安房之部 諸國追々出版 全二冊

古今五百題寸珍本 全四冊

俳諧獨警占 全二冊

俳諧道の使占 全二冊

俳諧戀の禁占 全二冊

發行

人坂 秋田屋 太右衛門

同 河内屋 喜兵衛

同 河内屋 茂兵衛

同 河内屋 藤兵衛

江戸 岡田屋 嘉七

同 小林 新兵衛

同 須原屋 茂兵衛

同 須原屋 伊八

書林

製本所

同 同 英 大 藏 助板

本石町十軒店角

